

part eight

number three edited by dr. masato mugitani

限定100部の内の11/100

スピリット・クロック・ダイヤル

麦谷真里

(まえがき)「スピリット・クロック・ダイヤル」は、単純に「クロック・ダイヤル」とも呼ばれ、ステージ・マジックのひとつで、基本的には観客の言った時刻を針が指し示すという手品です。道具もいたってシンプルです(写真70)。

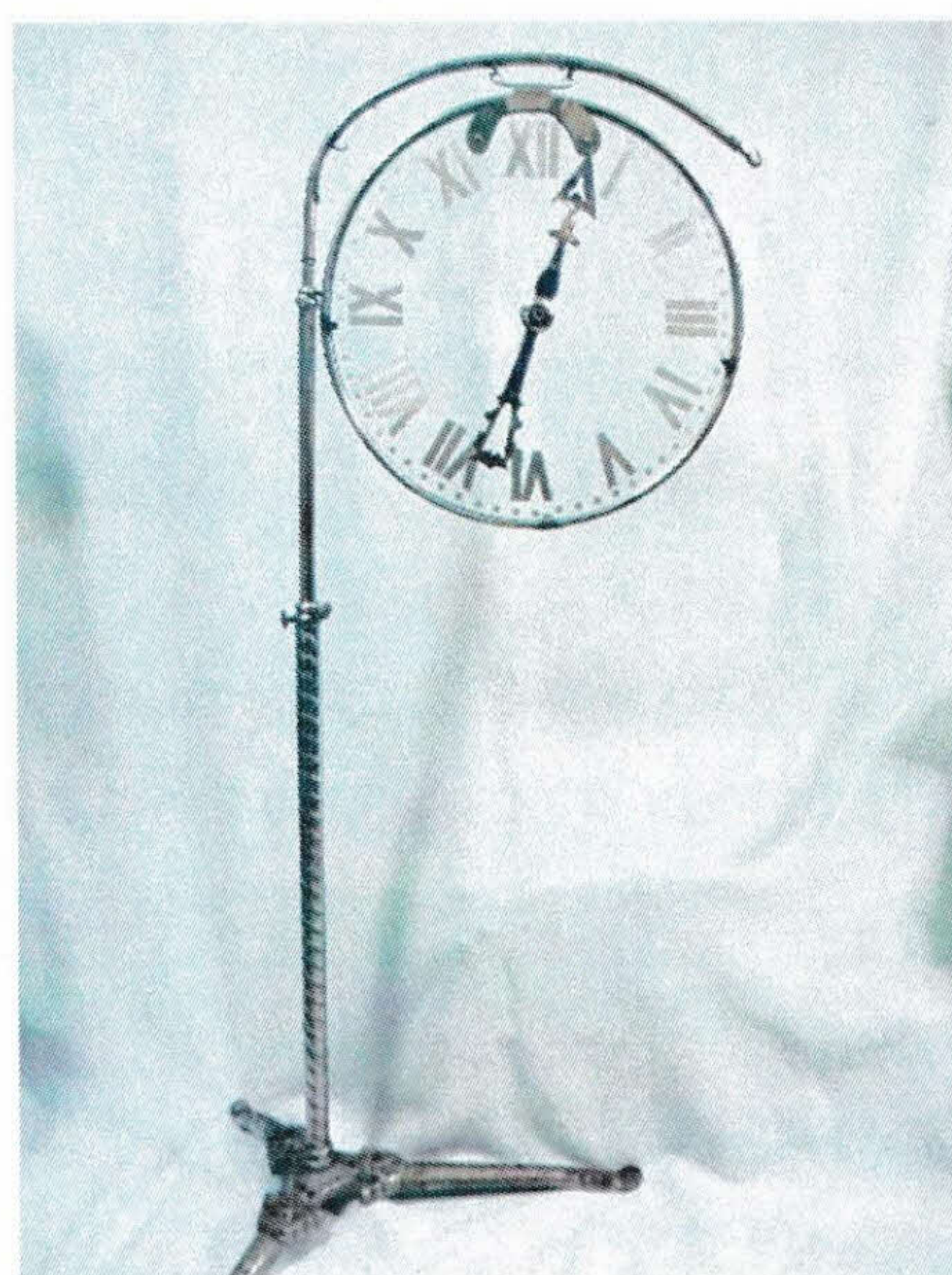


写真70

18世紀や19世紀に盛んに演じられていましたが、そのころのものは、糸で操作していたり、電氣的に操作していたりしていたものがほとんどでした。現在のように、時計の針に錘を仕込んで演技するように考えたのはホフジンサーで、20世紀以降はこの方式が主流になりました。観客の選んだ時刻を針が指し示す以外にも、カード当て(数字)に使ったり嘘発見器のように使ったりする演出もあります。この手品を観た観客は、誰しも時計にタネがあると思います。その疑いを予め晴らすためにも、20世紀の「スピリット・クロック・ダイヤル」はほとんどが写真70に示すように時計の文字盤が透明になっているものが多いです。Dr.Alboのシリーズでもいくつかの「スピリット・クロック・ダイヤル」が掲載されていますが、ほとんどが透明な文字盤です(写真71)。



写真71

ちなみに、冒頭に掲げた写真70のものは、私がアメリカ合衆国のオークションで落札したもので、オークション・カタログの説明によれば、1900年ごろの作品です。カタログには、落札予想価格も記入されていて、1500ドル～2000ドル(16万円～21万円)でした。実際のオークションでは、この予定価格より高くなるのが常です。私は、実際にアメリカ合衆国のオークション会場に足を運ぶこともありますが、最近では、インターネットでも入札できますので、パソコンの前に座れば、リアル・タイムでオークションに参加できるから便利です。ただし、時差があるので、夜中ずっと起きていなければいけないのが難点です。事前に自分の希望価格を登録しておく *absentee bid* という方法もあります。それだと夜中に起きている必要はありませんが、同時進行ではないので、あと100ドルで落札できたのに、と後から悔やんでもまさに後の祭りになります。もちろん、アメリカ合衆国のディーラーに頼んで代理で入札してもらうことも可能ですが、その場合は、代理人と電話しながら入札するのが普通ですから、やっぱり夜中に起きていなくてはなりません。いろいろやってみて私が一番良いと思うのは、実際にオークション会場に行って自分で入札することです。まず、事前に実物を見ることが出来ます。大きさとか品物の状態とか点検できます。説明書が付いているものと付いていないものがありますが、このときも、オリジナルの説明書なのか、コピーなのか、同種の商品の別の説明書なのか、細かいことを確認できます。次に、いくつか入札しているとオークション・マスターが私の嗜好を理解して、必ず、こっちに振るようになります。それがいいかどうかはわかりませんが、ずっと何時間も自分の集中力を持続するわけには行かないので、注意を喚

起してもらうのは悪いことではありません。会場での入札での欠点というか悪い点は、最後に競い合う相手が一人になって自分との一騎打ちになったときです。会場中の注目を浴びて引き下がれなくなります。こいつとき冷静になるのには場数と訓練が必要です。駆け引きを愉しむくらいでないと興奮して高い値段で落札してしまいます。私の場合は、知り合いのディーラーと目配せしながら、もうやめたほうがいい、と彼が合図したらやめることにしています。彼らはプロで相場を知っていますから、あまりにも相場より高くなった場合は教えてくれます。私も大概のものは相場観がありますが、珍しいものや、カスタム・メイドのものはやはりよくわかりません。たとえば、脱出王ハリーフーディーニの SAM の会員証(署名入り)などは、私は150ドル(1万6千円)でも入札しませんが、12,000ドル(130万円)で落札する人がいて驚かされます。ことほど左様に、オークション会場にはいろんな人が来ていて、カップ・アンド・ボールのカップを集めている人、Mike Caveney のように ephemera と総称される過去の有名なマジシャンの写真や手紙や日記などを中心に集めている人などいろいろです。そういう人たちと知り合いになって交流を深めるのも会場での楽しみのひとつです。

というわけで、私がこれまで入手した主な「スピリット・クロック・ダイヤル」を集めてみると、けっこうな数になりました(写真72)。しかも、これでも全部ではありません。

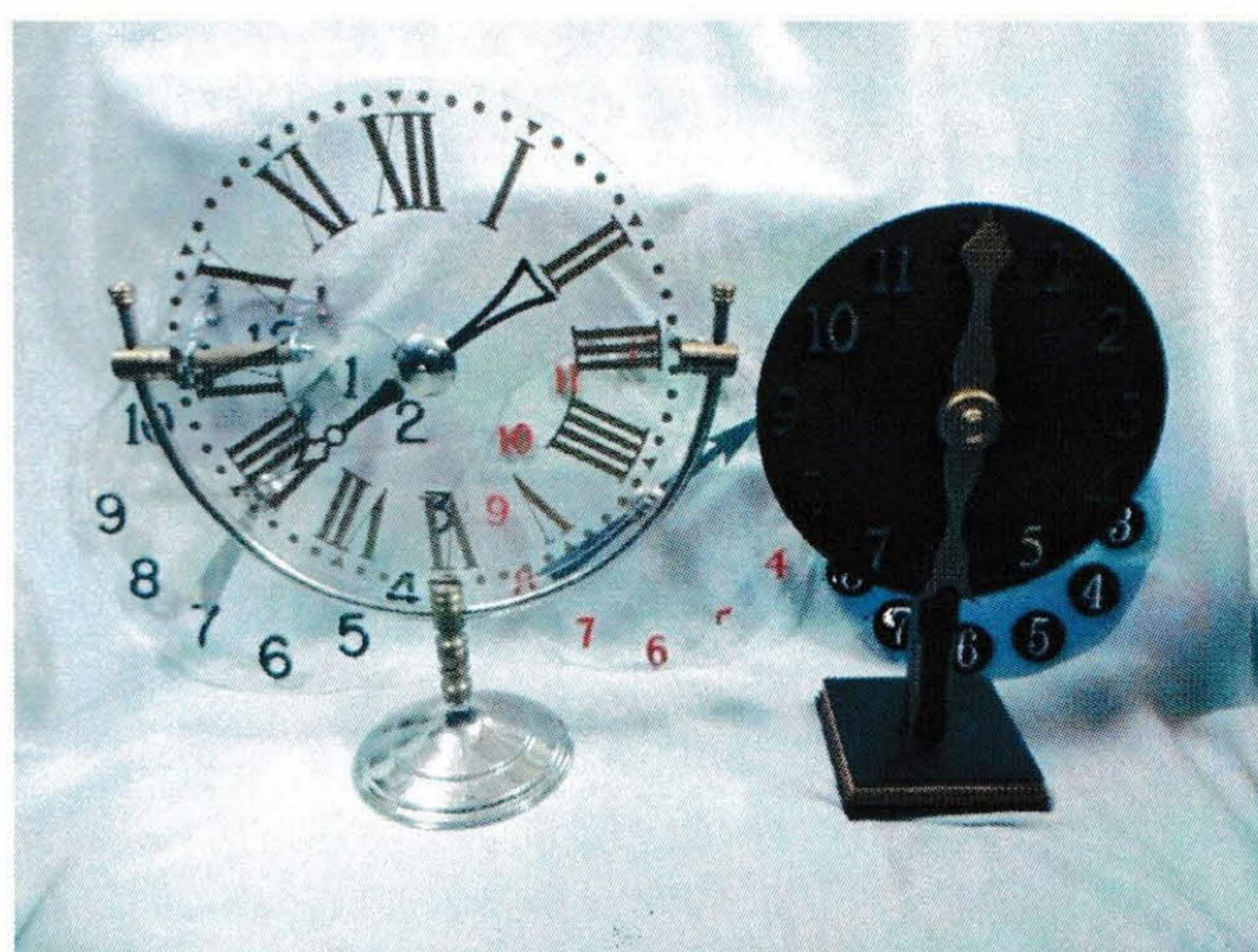


写真72

1. スピリット・クロック・ダイヤルの原理

現象は前述したように、観客が指定した時刻を針が指すことです。演出として、少なくとも観客の引いたカードの数字を当てるなどの現象も可能です。ただし、数字は12までしかありませんのでキングは工夫しなくてはなりません。また、嘘発見器のように使うには、偶数を指し示せば本場で嘘なら奇数に止まる、とでも説明しておけばそのような演出も可能です。いずれにしても、回転させた時計の針をマジシャンの望むところに止めさせるのがこの手品の現象です。このため、針の中央の丸い部分に錘が入っていて、錘は常に下方に来ますから、この錘と針との相対的な位置関係によって時計の文字盤上の針の指し示す数字が変わるというのがこの手品のタネともいべき原理です。まず、針の中央の丸い部分を開けてみます(写真73)。すべての針がこのように丸い部分を開けられる機構になっているわけではありませんので、もし、入手された場合でも無理

に開けないでください。

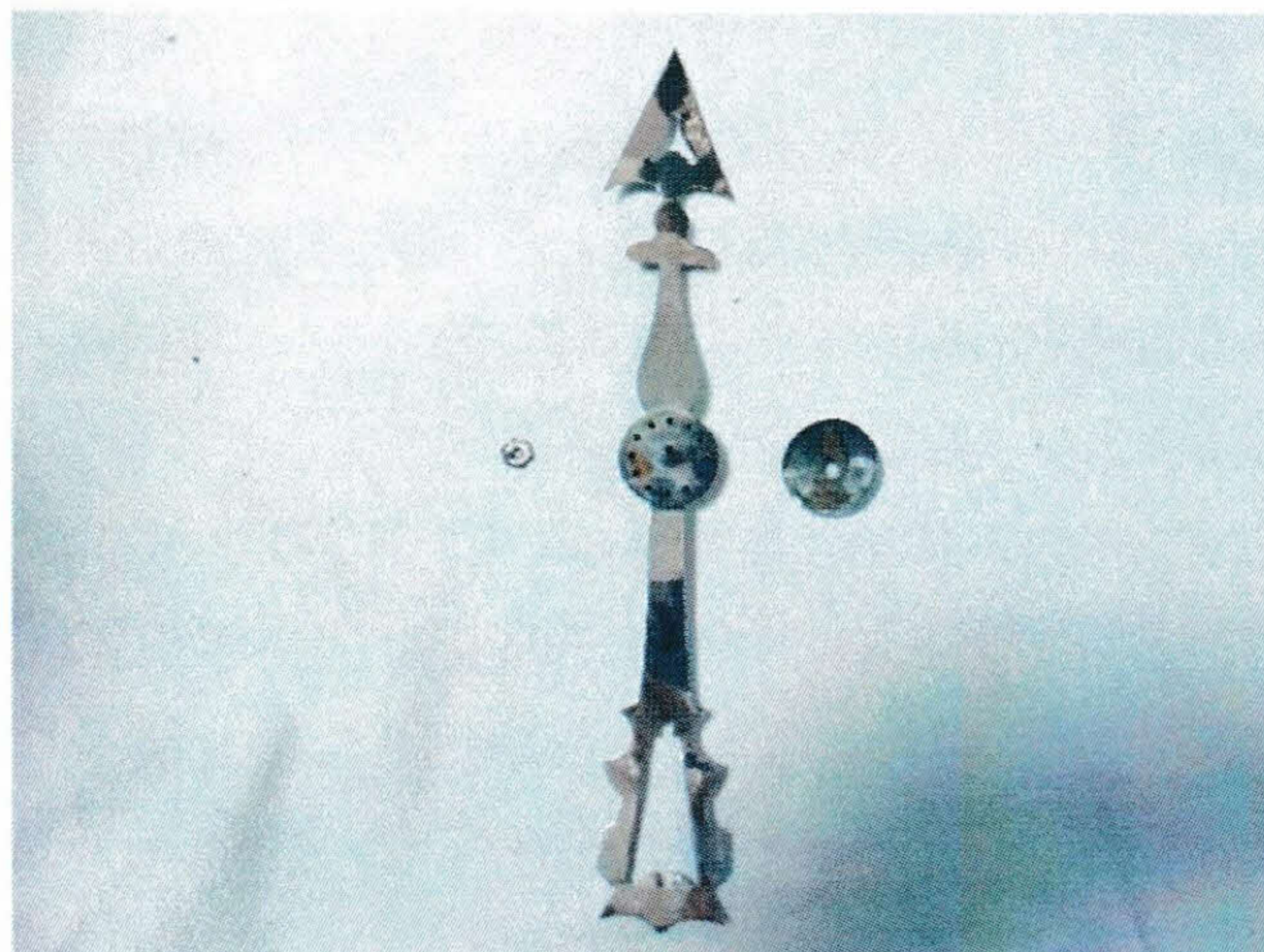


写真73

丸い部分の中に半円型の錘が入っていることがわかんと思います。針は丸い部分に固定されていますから、錘を動かすことによって針との相対的な位置関係が変わり、針の指し示す時刻が変化することになります。

錘は常に下にあるわけですから、錘が見える状態で針が何時の時刻を指し示すのかを検証してみます。まず、針が12時を刺すときの針と錘の位置関係は、写真74に、錘部分だけを中央に取り付けて針は外して中が見えるようにしてあります。すなわち、錘と針とが垂直に交差して、針は12時を指します。この動きを理解して針の指す位置を調整することになります。

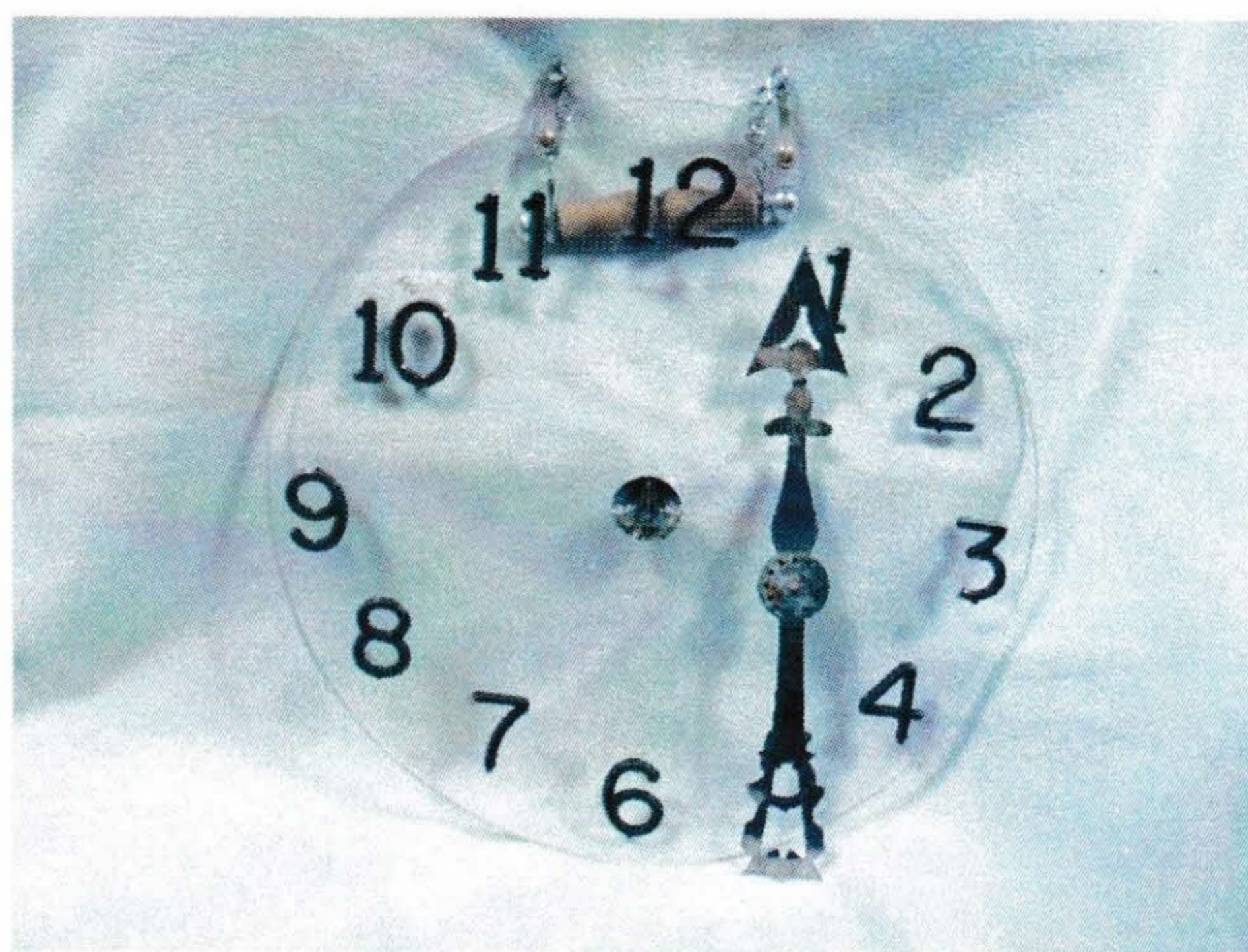


写真74

たとえば、次に、針を5時の位置に持って行こうとすると、一旦針を時計の文字盤から抜いて、錘と針の位置関係を、錘を回転することによって調整し、再び文字盤に戻して針が5時を指し示すようにします。もちろん、一旦抜いた針を文字盤に戻したあとは、一度何回か文字盤の上を回転させたほうが錘の調整が効くことになります。これは言うまでもなく、回転させた錘が重力に応じて下方に安定するまでに時間がかかるからです。慣れてくれば、ぴったり5時に止めることができるようになります(写真75)。錘は常に下で、針が回転しているだけです。

同様に、錘との位置関係を調整すれば、何時であっても止めることができるようになります。以上が、この手品の原理です。



写真75

2. スピリット・クロック・ダイヤルの操作

タネの原理は上述の通りですが、実際に、この針の中央部は元通りに蓋をすると見えなくなりますから、錘の位置の操作は中が見えない状態で外から行わねばなりません。中央の円型の部分のどこかに目印を付けて各時刻の位置を把握しておくにしても、この中央部分を回転して針の位置を調整することには変わりはありません。そのやり方は製品によって異なりますが、概ね次の3通りがあります。以下の解説は、実物を持っていない方にとっては何を言っているかわからない箇所があるかもしれませんが、できるだけわかりやすく解説しますので、写真を頼りに想像力を働かせてみてください。

- ①中央の丸い部分を直接回転させて中の錘を動かす(写真76)。
- ②中の錘と連動した円盤だけを外から動かす(中央の丸い部分そのものは動かさない)(写真77)
- ③中央の丸い部分の真ん中に中の錘を固定するストッパーのボタンが付いていて、それを外から操作することによってブレーキを解除して錘を動かす(写真78)。

現段階で、特に手元にスピリット・クロック・ダイヤルの用具を所有していない方にとっては、この3つの操作の違いは、さほどたいしたことのないように感じられるかもしれませんが、これは手品ですので、錘を動かす操作はあくまでも観客に悟られないように行なわねばなりません。つまり、観客が希望の時刻を表明したり言ったりした後で、ひそかにその時刻に針が止まるように錘を動かさねばならないのです。ここでお気づきの方もおられると思いますが、私の所有しているスピリット・クロック・ダイヤル(写真70)がそうであるように、時計の文字盤は透明で、かつ、マジシャンが直接手を触れることのないように支柱から吊り下げられています。道具が大仰なだけでなく、このような重い支柱と文字盤を舞台の袖から運ぶのは、当然、マジシャン自身ではなくてそのアシスタント(助手)が行ないます。すなわち、20世紀の職業奇術師たちには、多くの場合、アシスタント(助手)がいたのです。したがって、観客が自由に選んだ時刻を聞いてから、アシスタントが観客の見えないところで錘を調整した時計の針を手渡すかお盆にでも載せてマジシャンに渡せば良かつ

たのです。その場合は、針の調整方式が①であろうが②や③であろうが、マジシャンにとってはその違いは重要なことではありません。

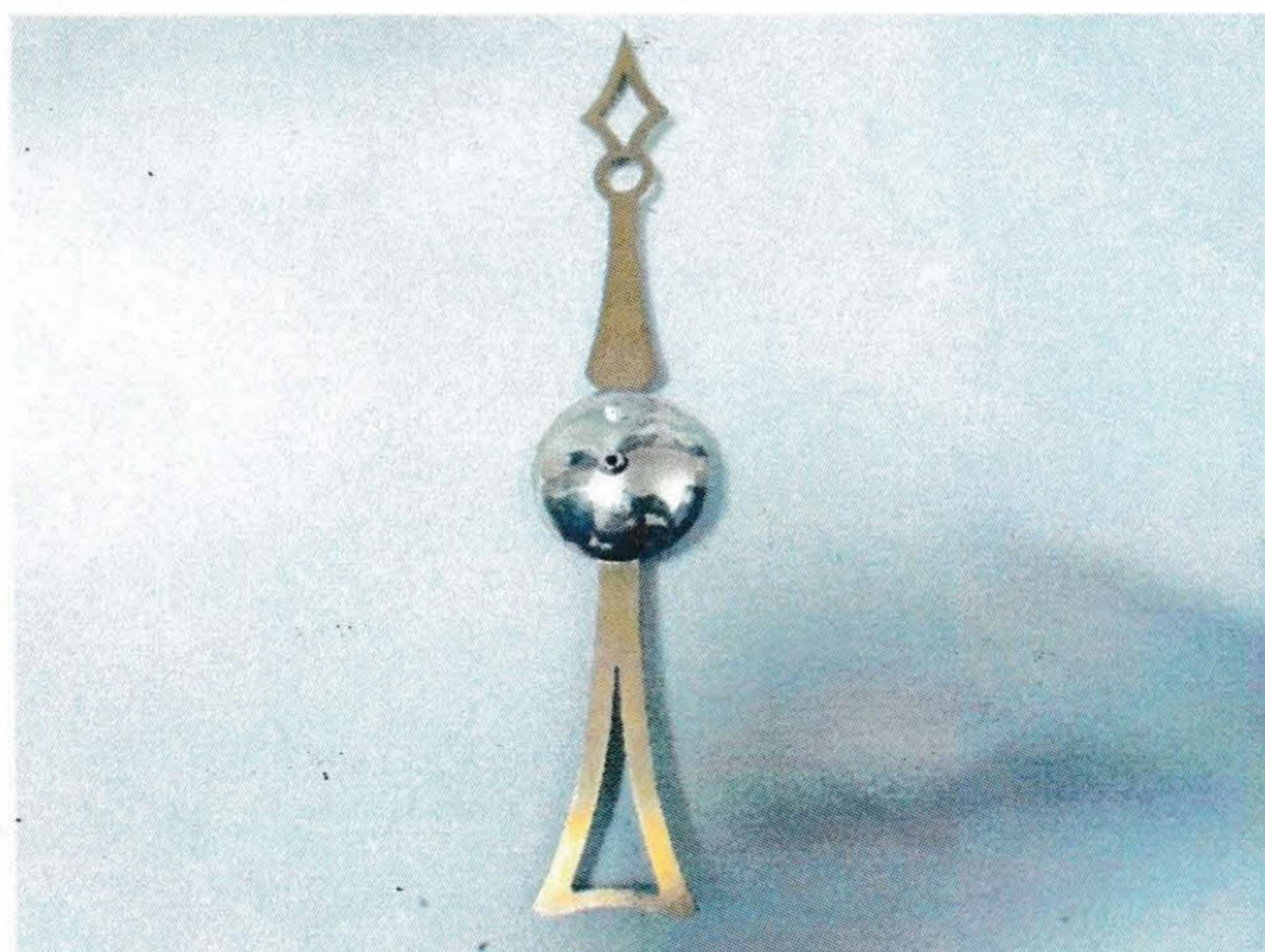


写真76

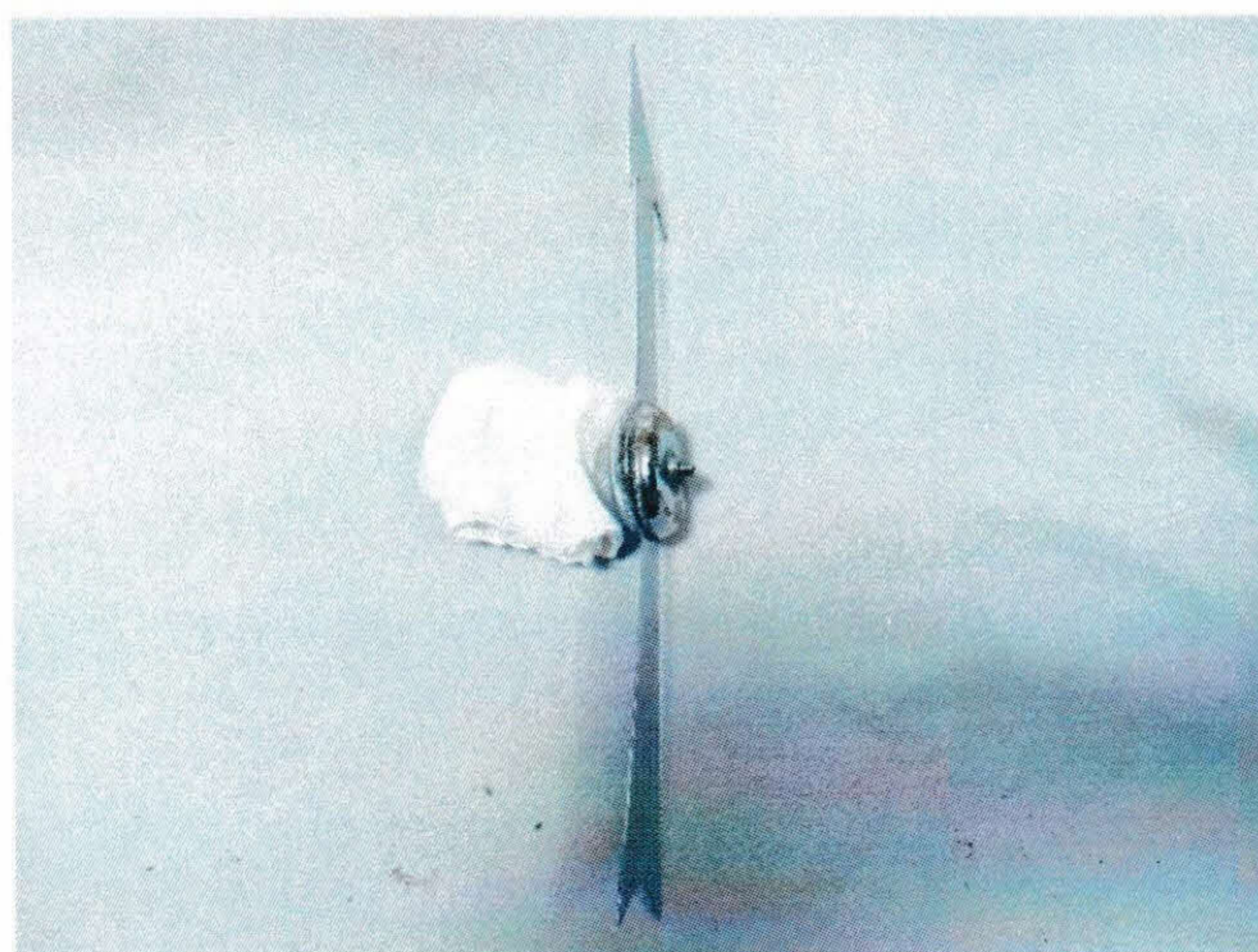


写真77

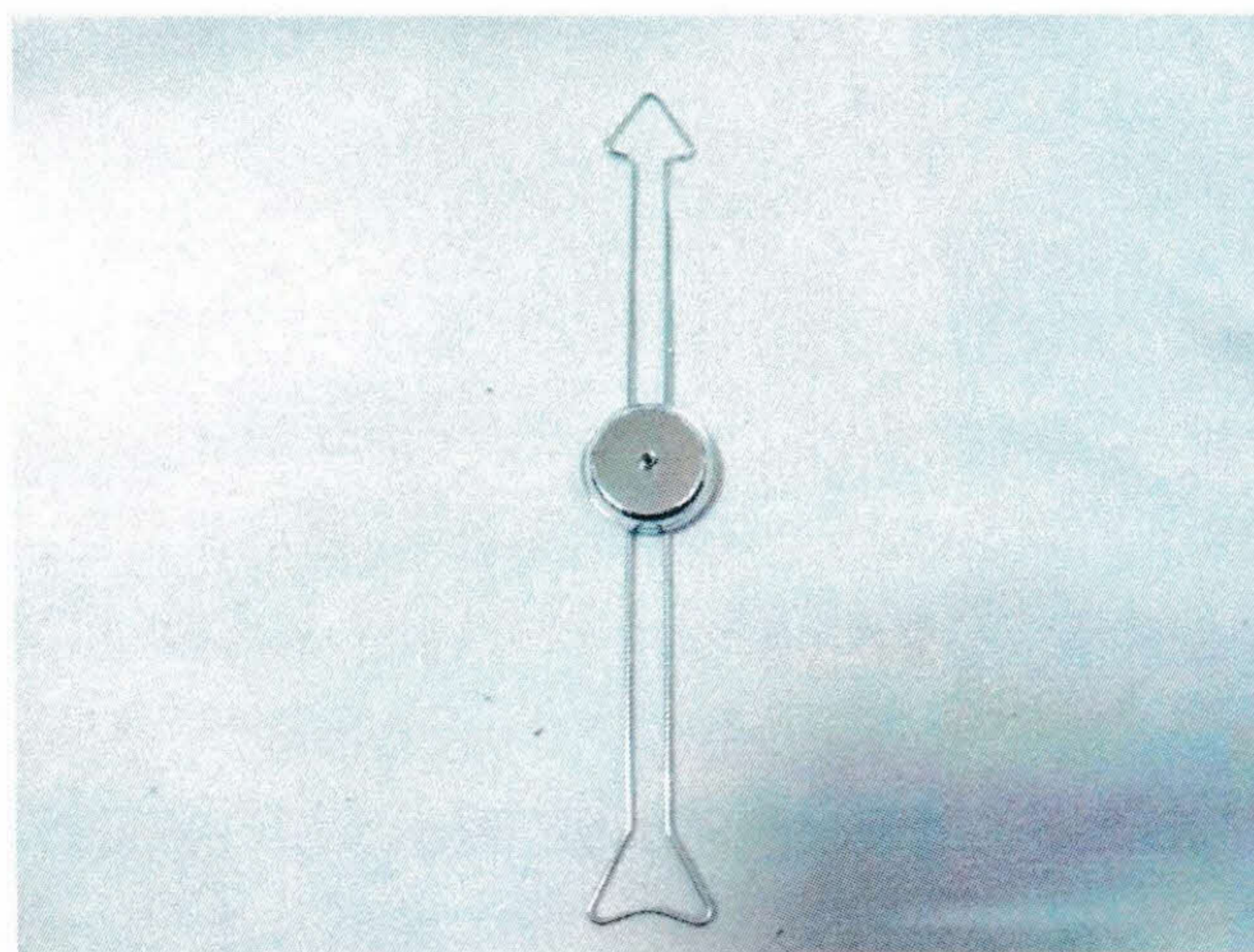


写真78

しかし、21世紀になって、手品もマチュアのマジシャンが隆盛になり、アシスタントを使わずステ

ージやサロンなどにおいて一人で演じるマジシャンが多くなりました。その結果、スピリット・クロック・ダイヤルにおいても、針の操作はマジシャンが一人で行なう必要が生じました。いきおい、①のような両手で操作しなければならない針は敬遠されます。

両手で操作しなければいけない針であっても、仮に、円型部分を回転することに摩擦抵抗のない機構であれば、片手で操作することができます。しかし、残念ながら、現存するスピリット・クロック・ダイヤルはほとんどが古いもののため、円型部分を片手で操作することができるのは少ないのが実際です。

操作形式の②は、回転する丸いベゼル(枠)が円型部分に付いていて、かつ、このベゼル(枠)は指で回転しやすいようにギザギザが付けてあるため操作性としては申し分ないものです。左手に持って、左親指と左中指でベゼル(枠)を保持して中の錘を回転させます(写真79)。

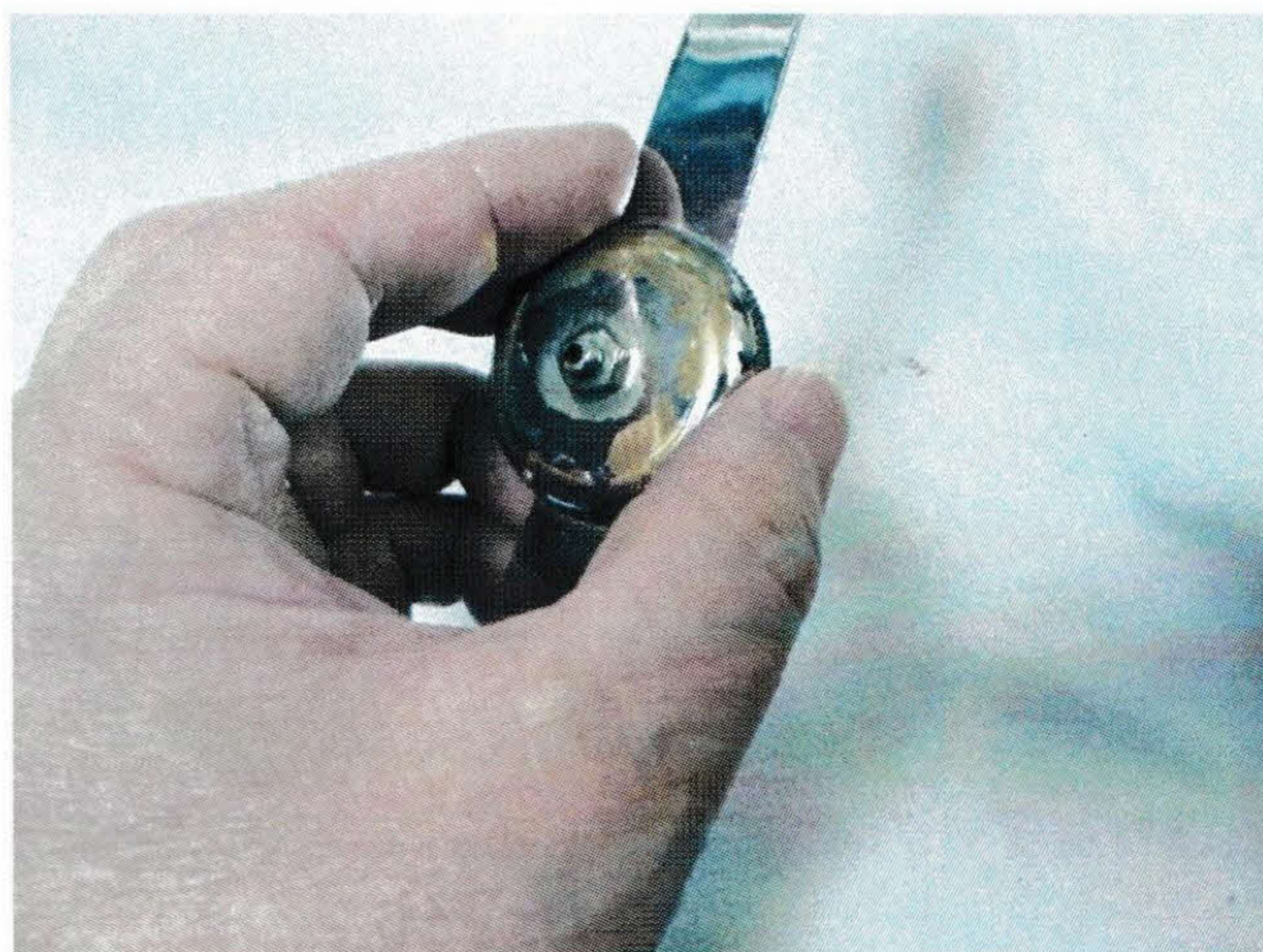


写真79

操作形式の③は近年になって開発されたもので、この形式の Spirit Clock Dial は、アルゼンチンの奇術用具店“Bazar de Magia”から2008年に売り出されました。価格は100ドルで、アメリカのディーラーでは75ドルで販売していましたから、安価と言っていると思います(写真80)。



写真80

コストを抑えるためか文字盤は粗末で、針も針金のような仕様ですが、中央の錘を操作する円

型部分のメカニズムは優れていて、円型部分の真ん中にあるボタンを押さえると、錘のブレーキが解除されて、錘は自由になります。そこで、錘を望む位置に操作して、ボタンを押さえている手を離せば、錘はその位置に固定されます。あとは、この針を文字盤に戻して回転させれば、針はセットした時刻に停止します。この機構の優れている点は操作が楽であるだけでなく、片手だけで簡単に針をセットできることです(写真81)。

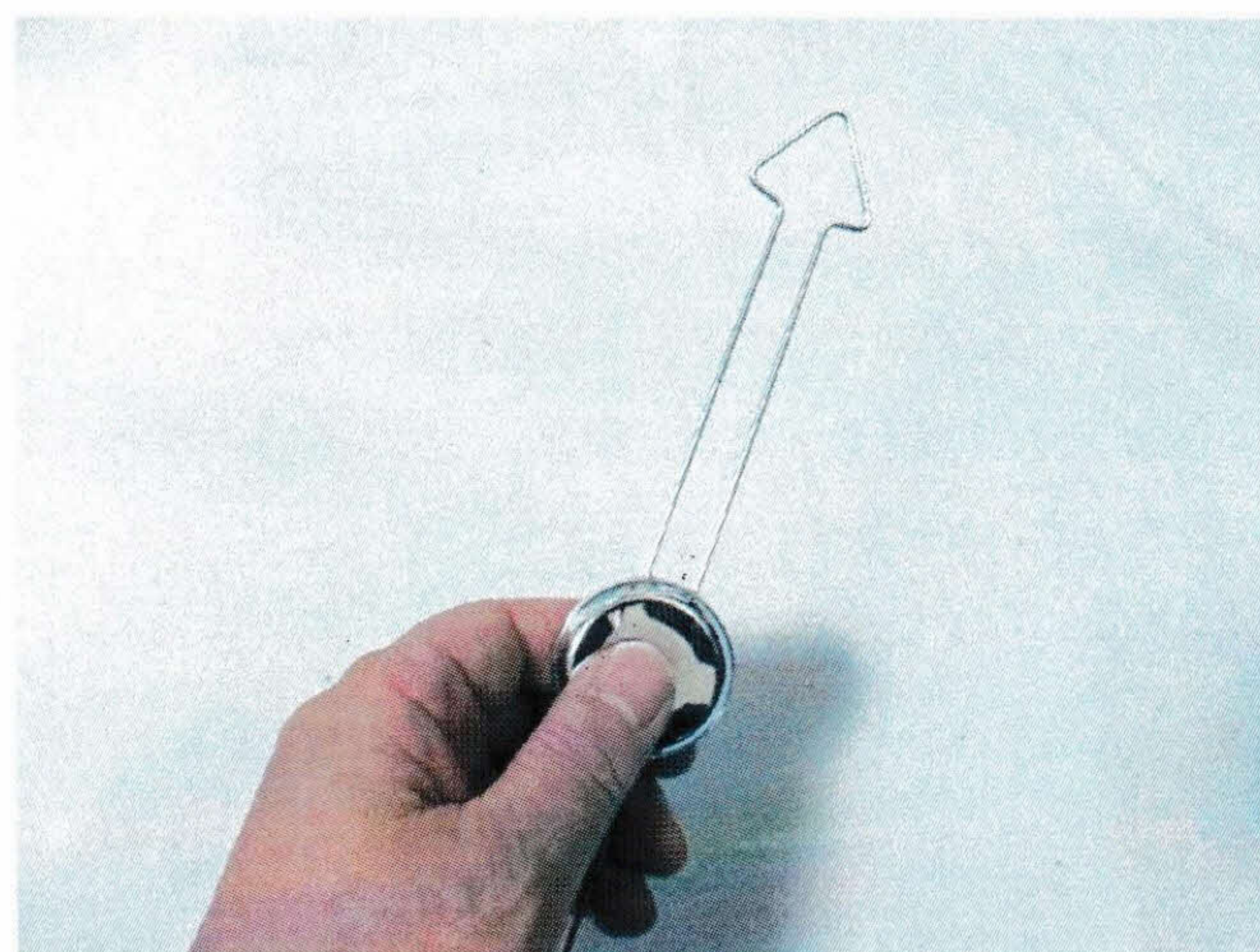


写真81

これは価格が安いことも相俟って人気商品でしたが、“Bazar de Magia”はなぜか、この商品を製造中止にしてしまいました。100年以上も前から市場に出ていたマジックですから、いまさら知的所有権の問題もないと思われますし、仮に製造コストがかかるのなら定価を上げれば済むことです。理由はよくわかりません。部品も単純なので、(株)テンヨーの金属製品のように、作っていた熟練職人が亡くなったというようなこともないと思われます。考えられるのは、この機構に故障が多くて、世界中からクレームや返品が相次いだのかもしれませんが。あるいは、マジシャンの思い通りに錘と針が連動しなかったのかもしれませんが。いずれにしても、このメカニズムの針の付いた Spirit Clock Dial は、オークションなどの中古市場でしか入手することができなくなりました。

3. 現在も入手できる Spirit Clock Dial

それでは、もう Spirit Clock Dial は購入できないかという、そんなことはありません。アメリカ合衆国のパサデナにある Carl Williams Custom Magic という奇術用具店から“Time Won't Tell”という題の Spirit Clock Dial が売り出されています(写真82)。最初のものは1985年ごろに発売されました。広告によると、世界限定24個と書かれていますので、もう入手できないと思われるかもしれませんが、けっこう中古市場で出回っています。私はディーラーから新品で購入しましたが、もうそのときの価格は忘れました。中古市場での現在の価格は425ドル(約4万4千円)ほどですから、オークションに出回るヴィンテージの Spirit Clock Dial に比べれば相対的に安価です。この Spirit Clock Dial の最大の利点は、すべて分解して小さく置くことができることです。ヴィンテージのものはどれも大きくてかつ重く、運搬には適していません。それに反して、この商品は木製でできていることもあり、分解して小さくすることができます。現代向きと言えます。



写真82

欠点は、写真82を見ていただくと一目瞭然ですが、時計の文字盤が黒いことです。木製で作って全体を軽くしようと試みたのだと思いますが、その結果、文字盤に何か仕掛けがあると思われてしまいます。かつ、木製の支柱や台もありますので、これらにも仕掛けがあるのではないかと疑われてしまいます。それは、写真70の透明な Spirit Clock Dial と比べると、その怪しげな雰囲気は明らかだと思います。木製の支柱や台には何も仕掛けがありませんので、これはきわめて残念なことです。ちなみに、この Spirit Clock Dial の針の操作は、①の方式で、中央の円型部分を回して中の錘を調整しますが、軽いので片手で操作できます(写真83)。

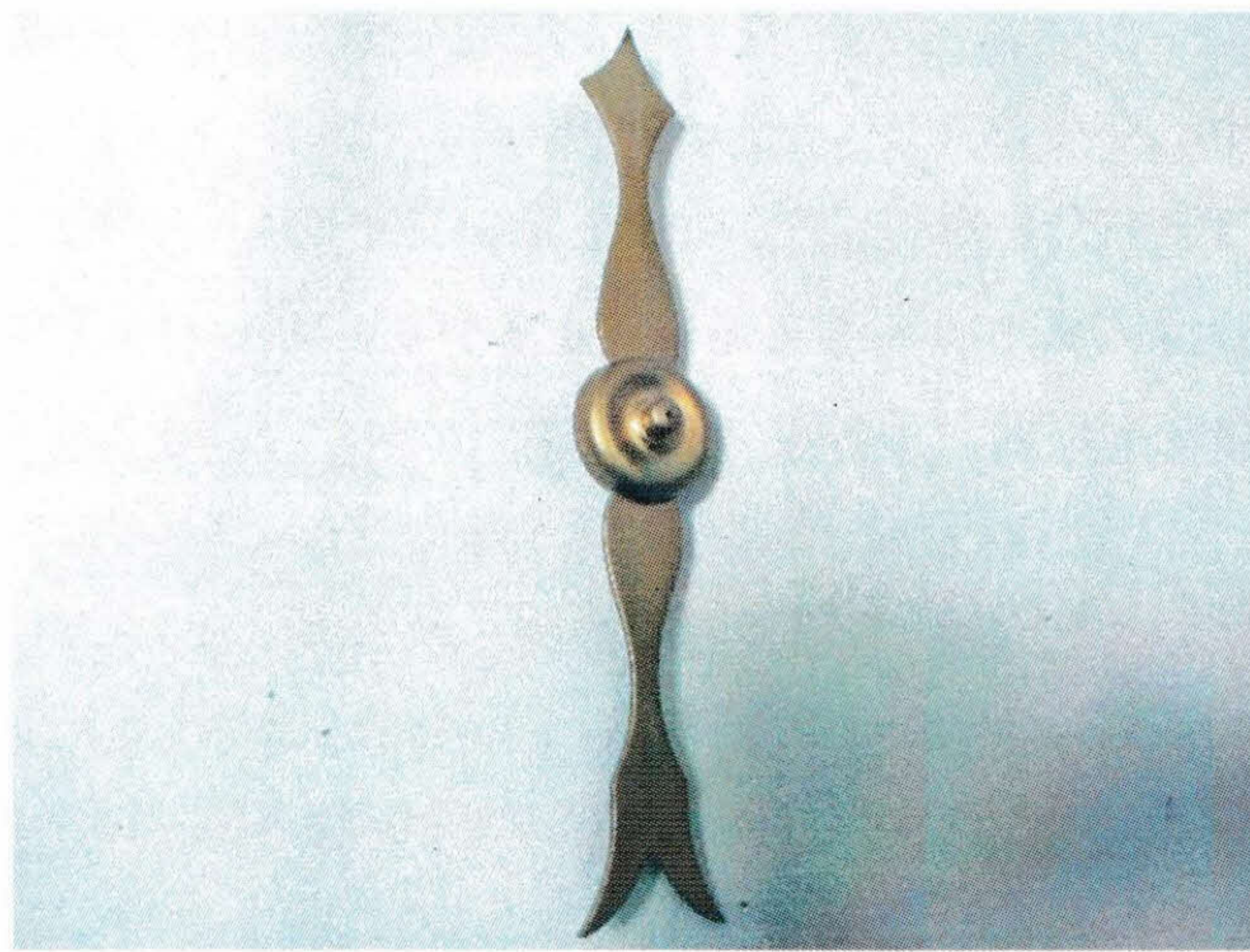


写真83

4. 実際の演技

[現象]客の任意に選んだ時刻に時計の針が止まります。

[必要なもの]

- ① Spirit Clock Dial
- ② 一組のデッキ(できればマークト・カード)

[やり方]

- ① 観客の中から一人の客をステージ(サロンなら前に)あげます。その客に用意したデッキ一組を

渡して、自由にシャッフルさせます。客が満足したら、デッキをそのまま客の手に持っていただき、「それでは、その中から、1(A)から12(Q)までの12枚を選んで私の手の上に出してください。12枚とも同じマーク(スート)でもいいですし、まったくバラバラなマーク(スート)でもかまいません」と言います。客がカードを出し始めたら、マジシャンは左掌を出して客が間違いなく1(A)から12(Q)を選んで出すかどうかチェックします。

- ②12枚を出し終わったら、デッキはどこかテーブルの上にでも裏向きで置いておいてもらいます。マジシャンは、まず客がトランプのA~12(Q)までの12枚のカードを自由に選んだことを強調します。次いで、この12枚を客に裏向きのままよく混ぜてもらいます。シャッフルでもカットでもかまいません。客が満足したら、12枚を裏向きでよく揃えて客の左掌の上に置いてもらいます。「それでは、一番上のカードを1枚だけ右手で取って、表を見ないで、あなた(客)のポケットに入れてください」こう言いながら、マジシャンは、客の左掌の一番上のカード(マーク・カード)を見て数字を覚えます。仮に11であったとします。マーク・カードは数字だけ読み取るのであれば比較的容易です。「いま、あなた(客)がポケットに入れられたカードは私(マジシャン)もあなた(客)も、もちろん、ご覧になっているお客さんたち(ほかの観客)も誰も、何のカードかわからないですね？」客が頷きます。ここで客に、残っている裏向きの11枚のカードを残りの裏向きのデッキの中に裏向きのまま混ぜてもらいます。これで何のカードが選ばれたか誰にもわからないはずですが、マジシャンには数字が11であることはわかっています。
- ③ここで Spirit Clock Dial を示します。まず、文字盤、次いで時計の針を外してステージの客に調べてもらいます。客から針を受け取り、それを文字盤に嵌めて回転させます。針が止まったら、「いま、針が指しているのは〇時です」と言います。次に一旦針を抜いて客に手渡します。この動作の間に、中央の円型部分を操作して、錘を適当な位置にしておきます。「どうか、あなた(客)もやってみてください」と言いつつ、客を促して針を文字盤に戻し回転させます。さきほどと異なる時間の位置に止まるはずですが、「このように、針はいろんな時刻を指すことができます」と言います。
- ④時計の針を三たび外して右手に持ちます。「この時計で、さきほどあなたが選んだカードが何であるかを当ててみたいと思います。さきほどのカードはちゃんとポケットにありますね？まだ取り出す必要はありませんよ」と言いながら、針で時計の文字盤を指しながら、右手の指先で針の中央円型部分を操作して、針が11時の位置に止まるように錘を操作します。
- ⑤客に針を渡して、文字盤に戻し少し強く回転させてもらいます。あまりゆっくり回転させるとすぐに11時のところに止まってしまうからです。「針の止まったところがあなたのカードの数字です」と言います。針は回転した後、ゆっくりと11時のところに止まります(写真84)。少くく曖昧な位置でも、マジシャンにはカードが11だとわかっていますから、強引に11時にします。
- ⑥「時計の針は11時を指していますね。これはあなた(客)の選んだカードが11すなわちジャックだということです。」と言って、客にポケットの中のカードをゆっくり出してくれるように言います。客がポケットからカードを出すと、それはみごとにジャックです。他の観客にもちゃんとカードの表が見えるようにして示し、針が確かにカードの数字を指したことを強調します。



写真84

[コメント]

単純に客の考えた時刻を当ててるのもいいのですが、その場合は、客が一人だけではあまりにもあっさりし過ぎます。それで、複数人に異なる時刻を選ばせて、それぞれに針を回転させることとなります。ところが、何回も針の動きを見ていると、錘による針の動きであることが観客にわかってしまう恐れがあります。そこで、上記のように、少し演出を加えて見せ方を工夫したほうが効果的です。また、上の解説ではマークト・カードを使っていますが、カード奇術を見せるわけではないので、最初からフォーシング・デッキを使ってもいいと思います。こういう場合はできるだけカード・テクニックを使わない方法のほうがいいのです。スリップ・フォースなどは言語道断です。

5. その他の使い方

観客が心に思った時刻を当てたり、文字盤の数字をカードに見立てて観客の選んだカードを当てたりするのが基本的な使用方法ですが、文献を見ると、嘘発見器として使っている演出もあるようです。針が6時前なら本当で、6時以降なら嘘であるとか、あるいは奇数なら本当で偶数なら嘘であるとか、そのような使い方だと思われそうですが、何度も行くと、針の動きで錘によるコントロールだとわかってしまう可能性があるため、嘘発見器として使うにしてもせいぜい2、3回ほどの回転だと思われそうです。もし、どうしてもバリエーションを演出したいのなら、時計の針を自分で作るのには容易ではありませんが、文字盤を作るのは、そんなに難しいことではありませんので、時計の時刻の数字の代わりに、たとえば、動物の絵などを配置したものを作って、子供向けのマジックに応用することは可能です。もともと文字盤には仕掛けがありませんから、どのような文字盤も創作が可能です。文字盤は透明なアクリルを円型にしたものを通販などで注文すれば作ってくれますので、針を支える棒のような支柱だけを螺子か強力な接着剤で中央に固定します。時刻の部分の数字や動物キャラクターなどは、裏面に接着剤の着いたものが玩具店や日曜大工の店で売っていますのでその中から選んで作成します。いずれにしても、観客の選んだところで針が止まるという演出です。

片倉雄一の

シガレットスルー・アウトダン

麦谷真里

(まえがき)片倉雄一君は夭折した非凡なマジシャンです。かつてお互いに20代のころ、ほとんど毎週のように会って、手品を見せあっていました。ちょっとはにかんだような笑顔を見せて、いつも私がびっくりする手品を演じてくれました。左掌に置いた小さなフラッシュ・コットンに右手の指先に挟んだタバコの火を近づけるとフラッシュ・コットンが閃光とともにハーフ・ダラーになります。左手はもちろん右手も空だったような印象です。私が驚いていると片倉君は笑って、種明かしをしてくれます。ハーフ・ダラーはタバコを持った右手にフィンガー・パームされていたのです。フラッシュ・コットンの閃光と同時にハーフ・ダラーを右手から左掌に落とすだけです。たったそれだけなのに、容易周到に両手が空に見える動作が仕込まれていたのです。こんなことが何度もありました。片倉君の作品のいくつかは、“masquerade part two”に収められています。

さて、表題の「シガレットスルー・アウトダン」は、かつて赤沼敏夫さんのトリックスから売り出された商品です(写真85)。

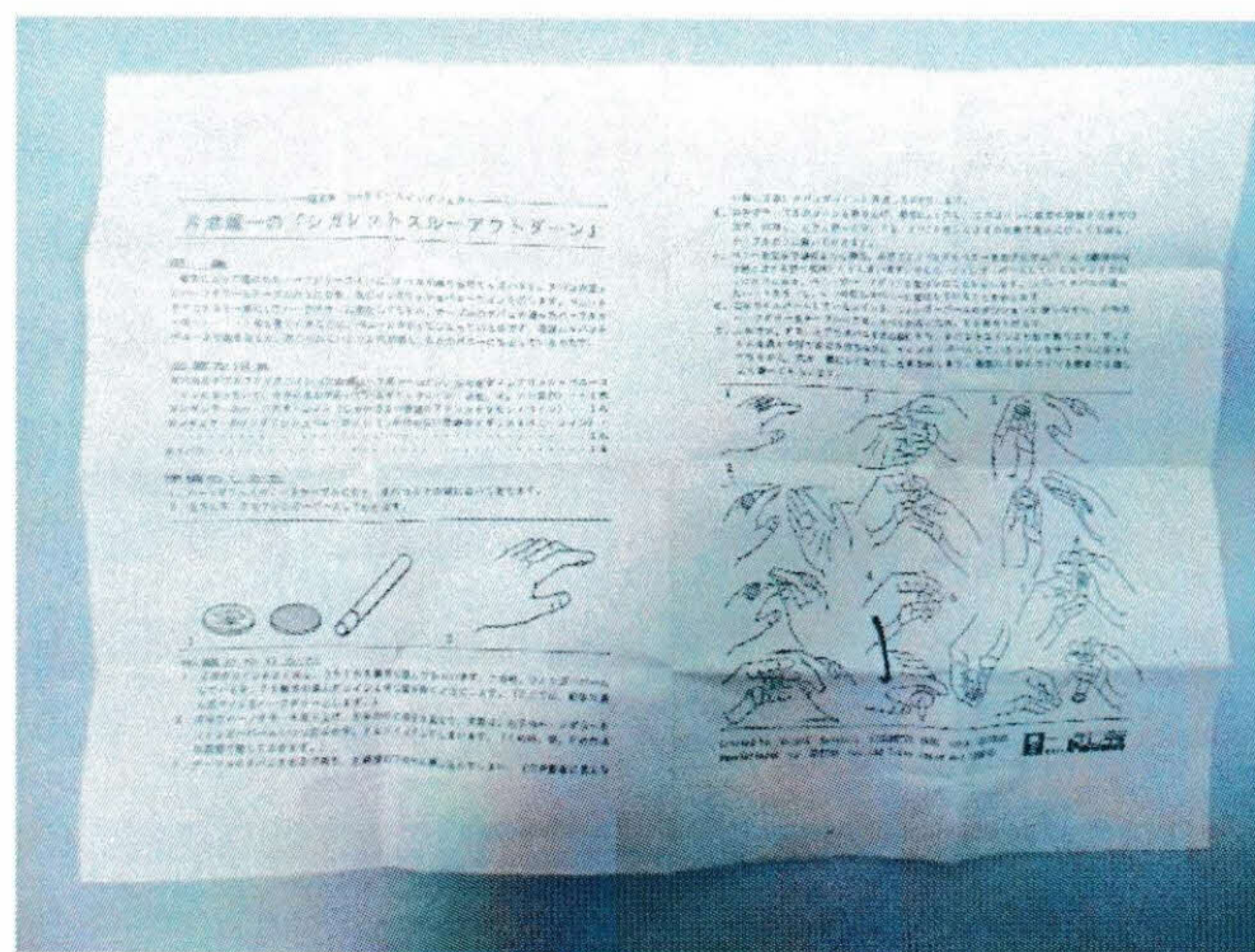


写真85

マニアックな商品ですから、そんなに売れたとも思えません。当時のトリックスのディーラーが誰であったかはわかりませんが、これを売り場で上手に実演するのは容易ではなかったと思います。

翻って、一時期、シガレット・スルー・コインのタネがテレビによって広く世間に拡散される事案がありました。私の記憶が正しければ、日本の貨幣で作られたシガレット・スルー・コインが貨幣損傷等取締法に違反するという事取り締まりの対象になったことにより世間の耳目を集め、それがたまたまシガレット・スルーの日本の硬貨であったことから、テレビのニュースやワイド・ショーなどで広く取り上げられてしまい、タネが広宣に流布したものと思われれます。これはその後、外国にお

いて日本の貨幣の加工をしても、それを販売目的で輸入した場合は違法であるとする最高裁判所の判例が平成19年(2007年)に出た確定しています。いずれにしても、フラップがあるかないとに関わらずシガレット・スルー・コインのタネが一般の多くの人に知れ渡ってしまったため、もう日本国内でこの手品を演じるマジシャンがほとんどいなくなりました。加えて、喫煙の害が国民の間に浸透し、喫煙者そのものが少なくなったばかりか、喫煙できる場所も制限されているため、タバコを使った手品が演じられることがなくなったことも大きな要因です。往年の石田天海氏や金沢天耕氏からしたら、まさかこんな時代が来るとは思いもよらなかったことと思います。ちなみに私(麦谷)自身も喫煙はしません。

さて、今回、この手品を解説しようと思って、改めて練習してみたところ、フィルター付きのタバコは、フィルターの部分が硬くてやや厚みがあって演じにくいことがわかりました。試行錯誤してみると、フィルターの付いてない昔の両切りのピースなどが適しているのですが、そのようなタバコはコンビニへ行ってもありませんでした。そこで、あきらめて、タバコの代わりに鉛筆を使うことにしました。現象そのものにはそんなに影響があるとも思えませんし、鉛筆を使ったおかげで最後にギャフ・コインを処理することができるようになりました。トリックスから販売されていた商品に付いている解説(写真85)は、おそらく片倉君のオリジナルのやり方よりは幾分やさしくしてあると思われますが、それでもスペルバウンドのときの技法などが入っていますので、今回は大幅にハンドリングを変えました。

[現象]

マジシャンは、ハーフ・ダラー(銀貨)とイングリッシュ・ペニー(銅貨)を示し、両方とも観客に調べてもらいます。次いで、銀貨を左手に持って、鉛筆を銀貨に当てると、驚いたことに鉛筆は銀貨を貫通してしまいます。貫通したままの銀貨を一旦テーブルに置いて、今度は銅貨を取り上げます。銅貨を左手に握ると銀貨に変わります。驚いて、鉛筆の貫通したコインを示すと、なんと、銀貨は貫通したまま銅貨に変わっています。この銅貨を鉛筆から抜いてテーブルの上に落下させるとどこにも穴は開いていません。銀貨、銅貨、鉛筆のすべてを観客に調べてもらうことができます。

[必要なもの]

- ①ハーフ・ダラー(銀貨) 1枚
- ②イングリッシュ・ペニー(銅貨) 1枚
- ③ハーフ・ダラーとイングリッシュ・ペニーのダブル・フェイス硬貨の中央にタバコの直径(約8mm)大の穴を開けた硬貨 1枚
- ④鉛筆 1本

①～③の3枚の硬貨を写真86に示します。ハーフ・ダラーとイングリッシュ・ペニーのダブル・フェイスは比較的簡単に入手できますから、直径(8mm)を言って、日曜大工の店などで金属工作を扱っている店に行ってドリルで開けてもらいます。単に金属に穴を開ける作業は、そんなに難しくはないので、小さな鉄工所や町工場でも頼めばやってくれます。

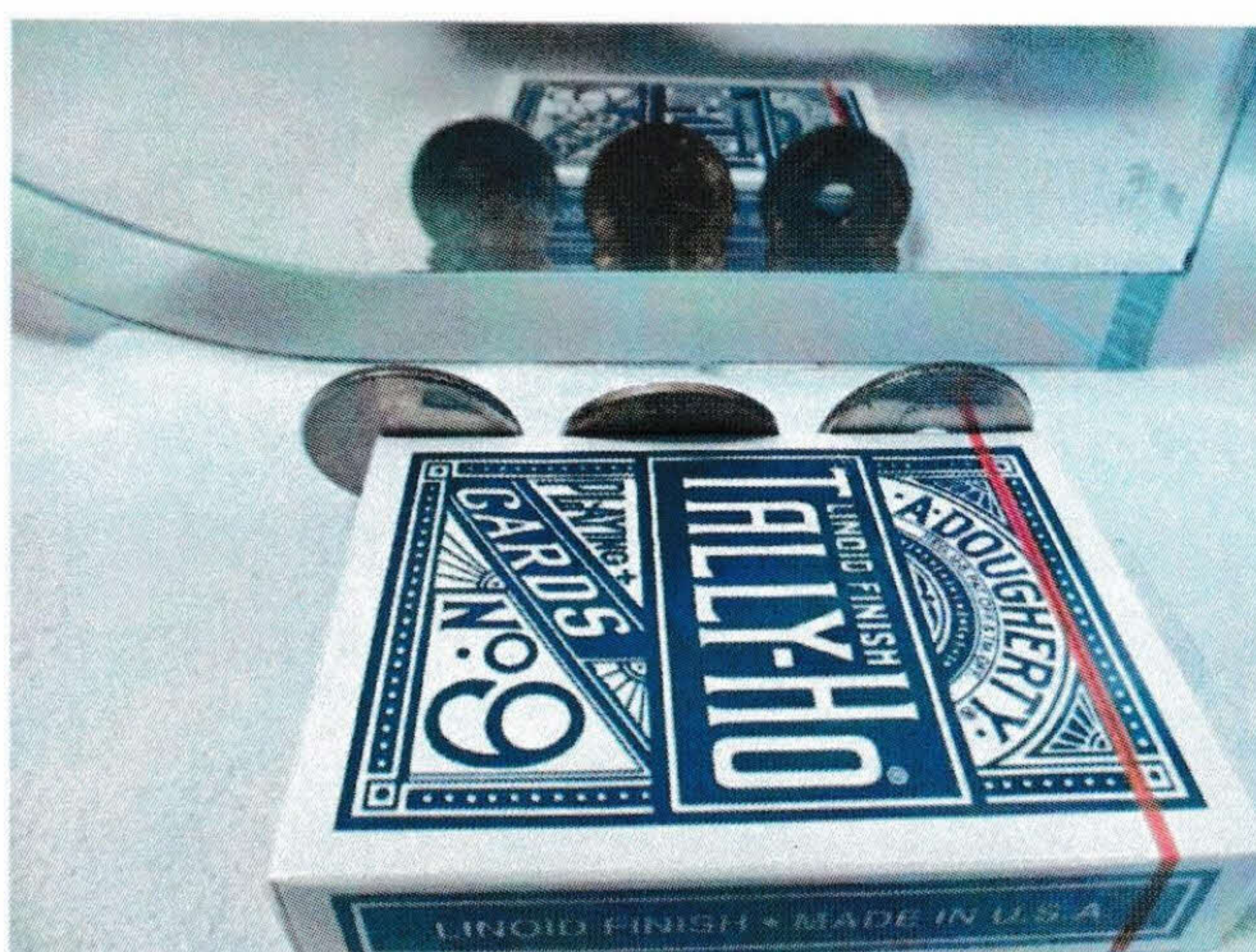


写真86

[準備]

左手に穴開きダブル・フェイス・コインを指側に銅貨が当たるようにしてフィンガー・パームしたまま、テーブル上に、銀貨、銅貨を並べておきます(写真87)。鉛筆はマジシャンの上着の胸ポケットに差しておきます。



写真87

[やり方]

- ①観客に、銀貨と銅貨を示し、1枚ずつ調べてもらってから再びテーブルの上に戻します。これはコインを調べてください、と言うのではなく、「アメリカの50セント銀貨を見たことありますか？」とか「イギリスのイングリッシュ・ペニーという銅貨を知っていますか？」という感じで軽く手渡すのがいい方法です。普通の観客は、コインに仕掛けがあるなどとは思っていませんから、コインをよく調べてください、などと言って渡しても、何を調べていいのか面食らいます。何気なく手に取って、表と裏を確認するくらいでちょうどいいのです。アル・ベーカーの「追いかけてもいけないのに逃げてはいけない」という類です。
- ②観客が調べたら、銀貨と銅貨のうち好きなほうを選んでもらいます。どちらを選ばれても、マジシャンズ・チョイスを使い、右手で銀貨を取り上げます。「それでは、銀貨を使います」と言いながら、

銀貨を左手に渡すと見せてシャトル・パスの要領で、右手にフィンガー・パームして、同時に左手を開いて穴開きダブル・フェイスの銀貨側を見せます。このとき、コインの穴は左親指で塞いでおきます(写真88)。



写真88

- ③右手は銀貨をフィンガー・パームしたままです。この右手で上着の胸ポケットから鉛筆を取り上げて、左手のコインの上に立てるような感じで穴の上に入れます。左親指は横へ除けます(写真89)。

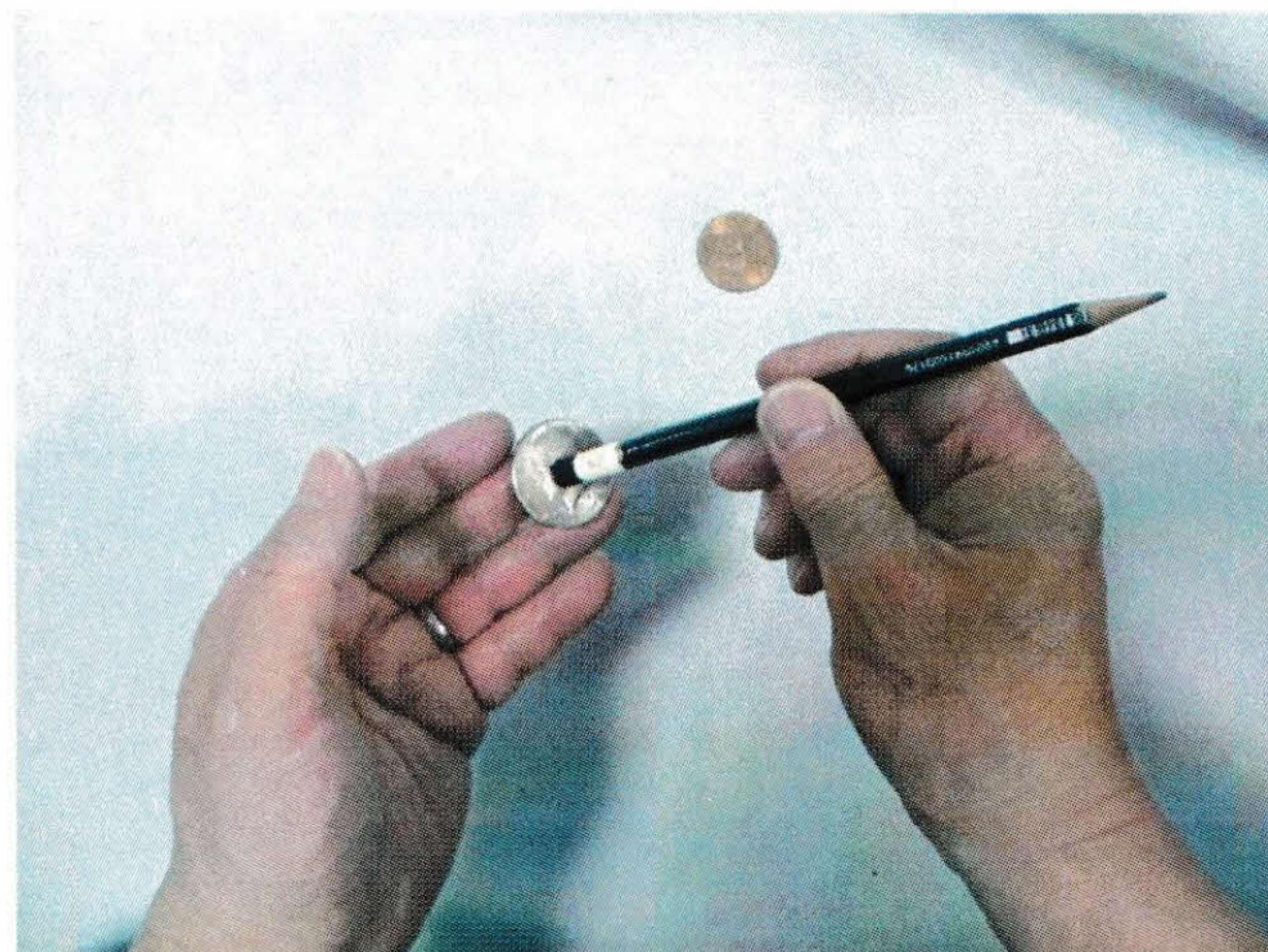


写真89

- ④鉛筆を強く押しつけてコインの穴の中に入れて行きます。実はタバコと鉛筆の違いは大きいのです。最初にタバコをコインの穴に入れようとする、タバコは意外に柔らかくて、ちょっと入りにくい抵抗があります。それを嫌うマジシャンの中には、タバコに一度火をつけてちょっと吸ってから、火の点いたタバコでシガレット・スルー・コインを演じる人がいるくらいです。火を点けて吸うと、中のタバコの葉が締まってタバコ全体が固くなります。加えて、吸い口を唇で少し噛むためにコインに入れる側の端がやや小さくなってコインの穴に入れやすくなるからです。しかも、タバコは中が葉っぱですから一定の弾力があり、この弾力のおかげで穴に入れたタバコとコインの間に隙間がなくなります。翻って、鉛筆はまったく弾力がありませんから、コインの穴に入れやすい

反面、コインと鉛筆との間に僅かに隙間が生じます。鉛筆が穴を通過したら、直ちにコインを左親指で立てて親指と他の指で持ったまま鉛筆をさらに挿入させて行きます(写真90)。

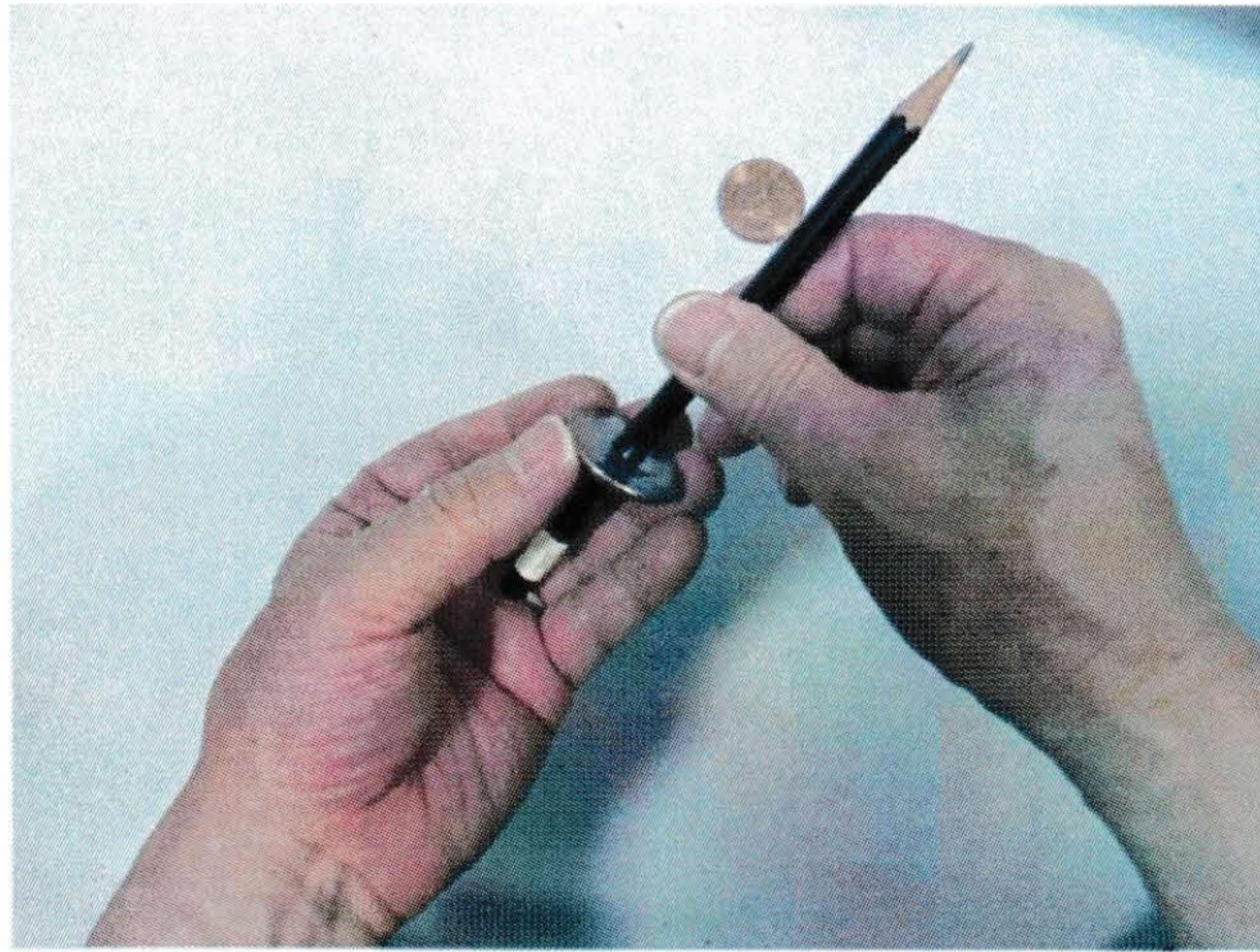


写真90

⑤このまま鉛筆が貫通したコインをよく見せたら、それをそのままの形でテーブルに置きます。銀貨側が観客のほうを向いています(写真91)。

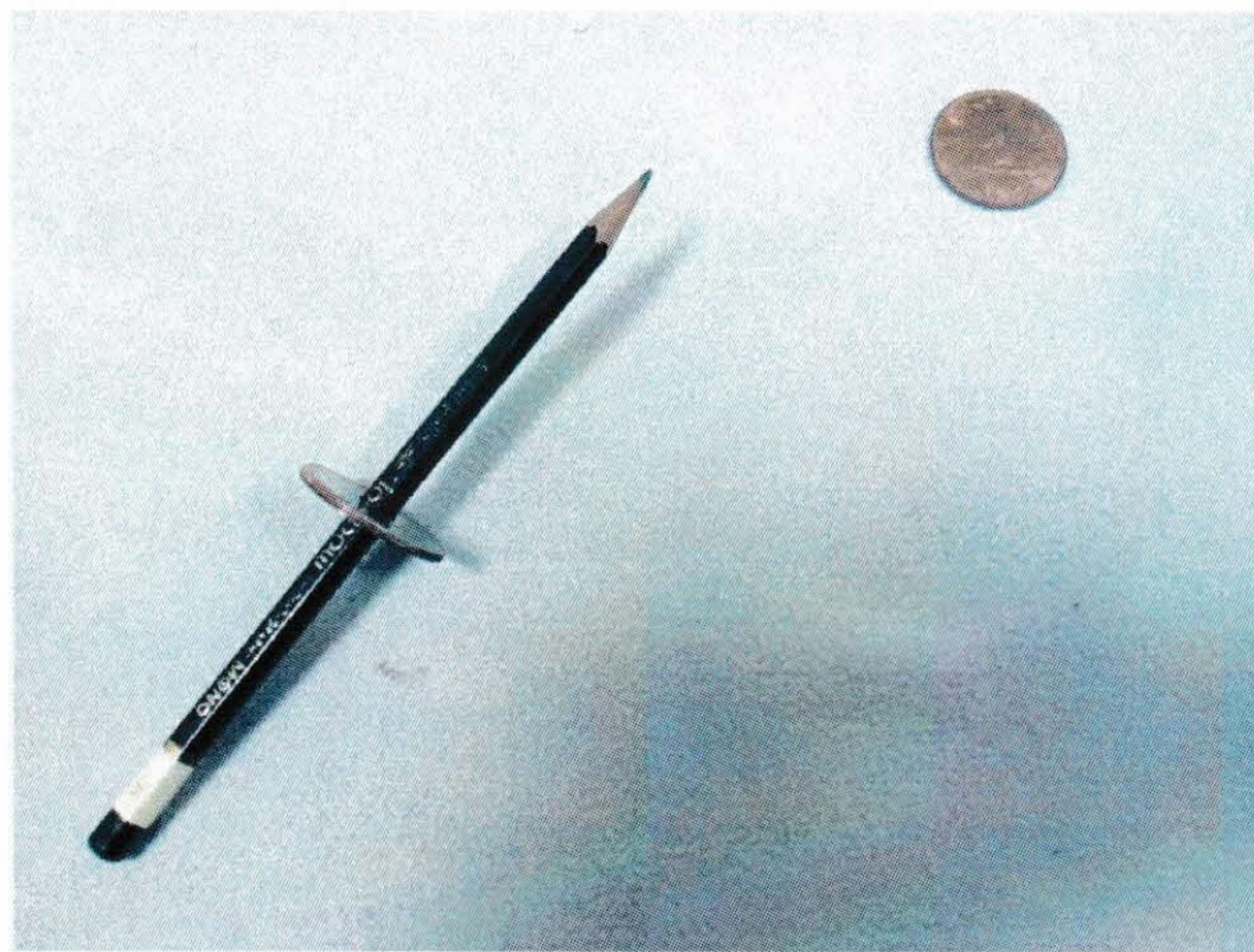


写真91

⑥左手が空であることを何気なく見せながら掌を上にして。右手の指先でテーブルの上から銅貨を取り上げます。この銅貨を左掌に置くと見せて実際はサム・パームし、右手にフィンガー・パームしていた銀貨を左手に渡します(写真92)。ただちに左手を握ります。観客は、マジシャンの左手に握られているのは銅貨だと思っています。「ご覧ください」と言って、握った左手をやや高く上げ、その間に、右手にサムパームしている銅貨をフィンガー・パームに移しながら右手の指先で鉛筆の客側を持ちます。左手を開いて、銅貨が銀貨に変わったことを見せます。同時に、右手の鉛筆を、ダブル・フェイス・コインの表裏が反対になるように回転させて、コインの銅貨側が観客のほうを向くようにします(写真93)。観客からは、マジシャンの左手に握られた銅貨が銀貨に変わり、鉛筆が貫通していた銀貨が銅貨に変化したように見えます。別の言い方をすると、手の中の銅貨と、鉛筆が貫通していた銀貨とが入れ替わったように見えます。実はタバコだ

と両端とも区別がつかないので、ダブル・フェイス・コインをひっくり返したことに気づかれませんが、鉛筆は両端が異なるばかりでなく、いまの場合は片方が削って芯を出してありますので、コインをひっくり返したことに観客が気づくのではないかと心配される方がおられるかもしれません。それが杞憂です。そもそも、最初にコインの裏表は示してありますし、ダブル・フェイス・コインの存在など観客には思いもよりませんから、安心してください。

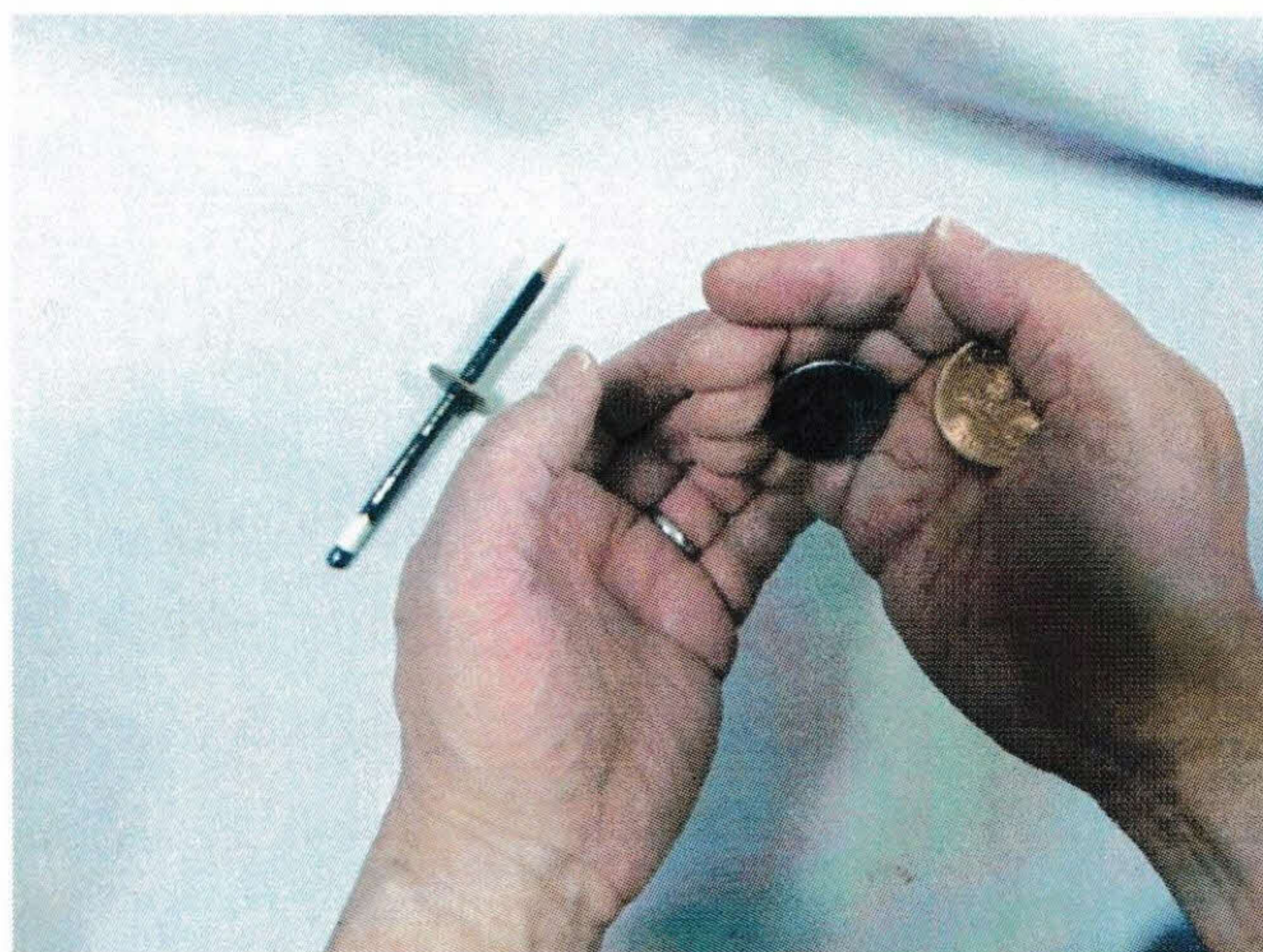


写真92



写真93

- ⑦「銀貨と銅貨が入れ替わりました」と言って、左手の銀貨を左手の指先で持って示します。右手は鉛筆を指先で持って、銅貨側を観客に見せています。本物の銅貨は右手にフィンガー・パームしたままです。左手の銀貨をテーブルの上に置くか、観客に渡すかして、空いた左手で右手の鉛筆に入っている銅貨の上側の鉛筆を持ちます。この状態で、右手の親指と中指とでダブル・フェイス・コインを持って、下方に引き抜き抜く動作を行います(写真94)。右手にフィンガー・パームしている銅貨はそのままです。右手でダブル・フェイス・コインを下方へ引き抜きながら、鉛筆を持っている左手を立てます。鉛筆を立てながら右手の甲が観客の方を向くようにします。ダブル・フェイス・コインは右手の指先で持っていますが、もう観客からは見えません。観客の視界から隠れたら、ダブル・フェイス・コインを鉛筆から抜いて、そのまま右手の親指と人差指

とで挟んで、フィンガー・パームしていた銅貨をテーブル上に落下させます(写真95)。



写真94



写真95

⑧観客は落下した銅貨に注意を向けますが、穴があいておりません。この間に、ダブル・フェイス・コインを保持したまま、右手で左手の鉛筆を持ち、上着の胸ポケットに戻します。このとき、持っていたダブル・フェイス・コインも上着の胸ポケットの中に一緒に落として処理してしまいます。

[コメント]

ハーフ・ダラーとイングリッシュ・ペニーのダブル・フェイス・コインは、普通のケネディ・ハーフのものなら、Tango 製が1枚20ドル(約2100円)で市販されています。これは日本のディーラーでも購入できますし、価格も1枚2400円と手頃です。「普通の」と書いたのは、普通じゃないのもあるわけで、それはたとえば、コインの種類をウォーキング・リバティとかフランクリンとか選べて、さらに、銀貨も銅貨もヘッドかテイルかどっちか選べます。その代わり、1枚1万円近くしますし、いつも作ってもらえるわけではありません。もっと大事なことは、この銀貨と銅貨のコインは、私は勝手にダブル・フェイス・コインと表記していましたが、英語では、Copper Sliver Coin と呼びますので、注文されるとき間違わないように注意してください。

アンリ・マイヨールの 2つのブレスレット

麦谷眞里

(まえがき)「アンリ・マイヨール」のと書きましたが、私はこのマジシャンのことをよく知りませんでした。名前のスペルは、Henry Mayol です。名前の発音からするとフランス人です。Whaely のマジシャンの事典にも載っていません。この手品は、高木重朗さんの解説で商品化されたようですが、解説書のどこにも販売している奇術材料店の名前がありませんので、ひょっとしたら、どこかの奇術クラブの発表会などに「おまけ」として頒布されたものかもしれません(写真96)。

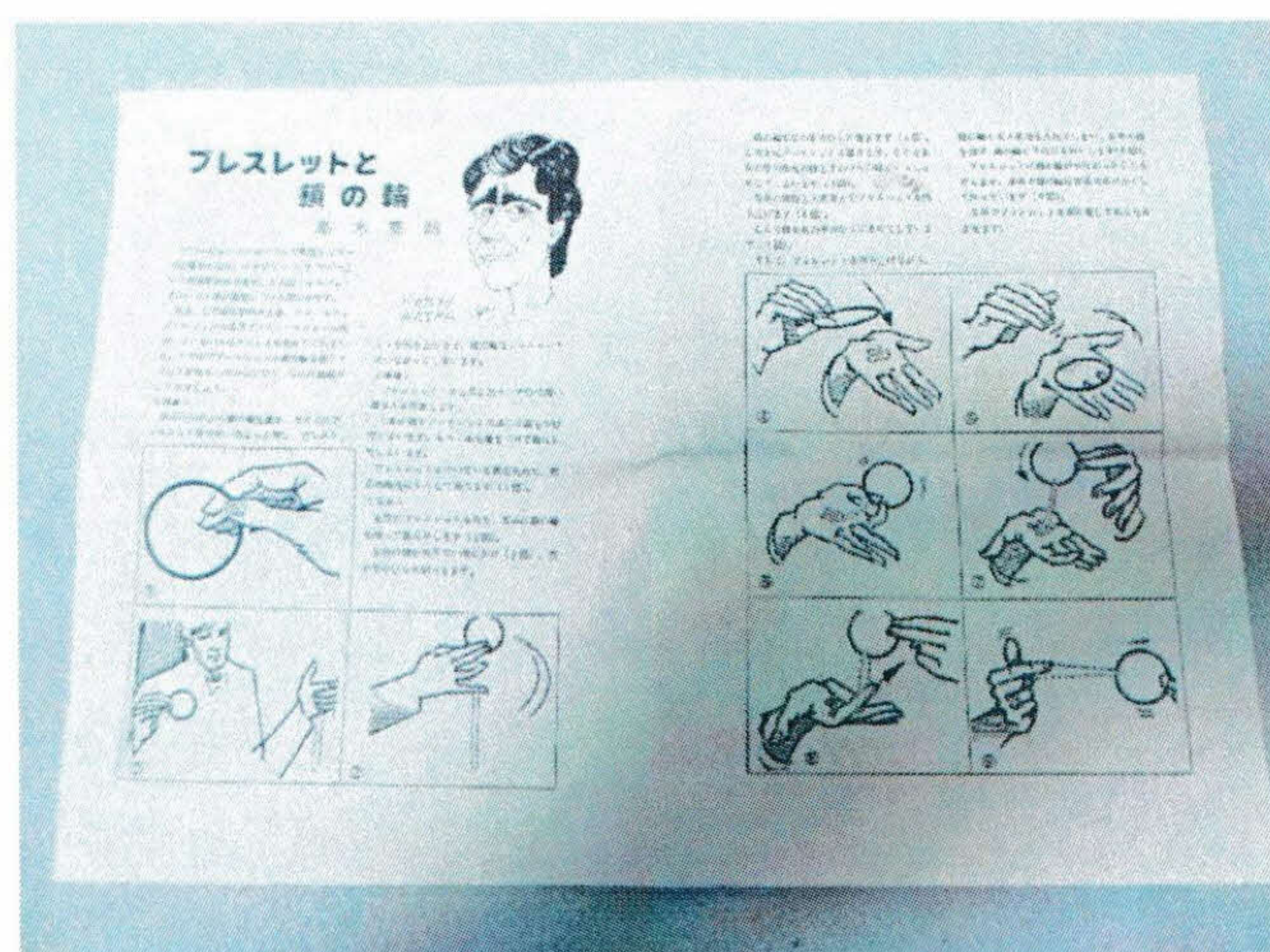


写真96

解説書の冒頭に次のように書いてあります。

「パリのムーランルージュで有名なピガール広場のそばに、アカデミー・ドゥ・マジックという奇術店があります。これはジョルジュ・プルースト氏が経営している店なのです。先日、この店を訪れたとき、クロス・アップ・マジックの名手アンリ・マイヨール氏がいろいろなマジックを見せてくれました。その中でブレスレットと鎖の輪を使うマジックがおもしろかったので、ここにご紹介してみましよう」

この説明でやっとわかりました。George Proust の "ACADEMIE DE MAGIE" は、フランスではかなり大きな奇術材料店で、博物館も併設しています。しかし、店はすでにピガール広場にはなく、現在は、セント・ポール駅のほうに移っています。現在でも営業していて、今回取り上げるアンリ・マイヨール氏の手品や本や DVD など扱っています。アメリカのディーラーに彼の作品や本がないのはすべてフランス語だからで、フランスでは有名なマジシャンのようです。

高木さんは、「ブレスレットと鎖の輪」と書かれていて、それが表題にもなっていますが、これは鎖のほうも大きさから言えば手首に巻く鎖状のブレスレットで、そこで、今回の表題は「2つのブレ

スレット」としました。

[現象]

マジシャンは、リングと鎖の2つのブレスレットを示します。完全に離れていた2つのブレスレットがいつのまにかつながってしまいます。

[必要なもの]

- ①リング状のブレスレット 1個(写真97)
- ②鎖状のブレスレット 同じものを2個 (長さが40cm程度、鎖が小さくまとまるもの)(写真97)

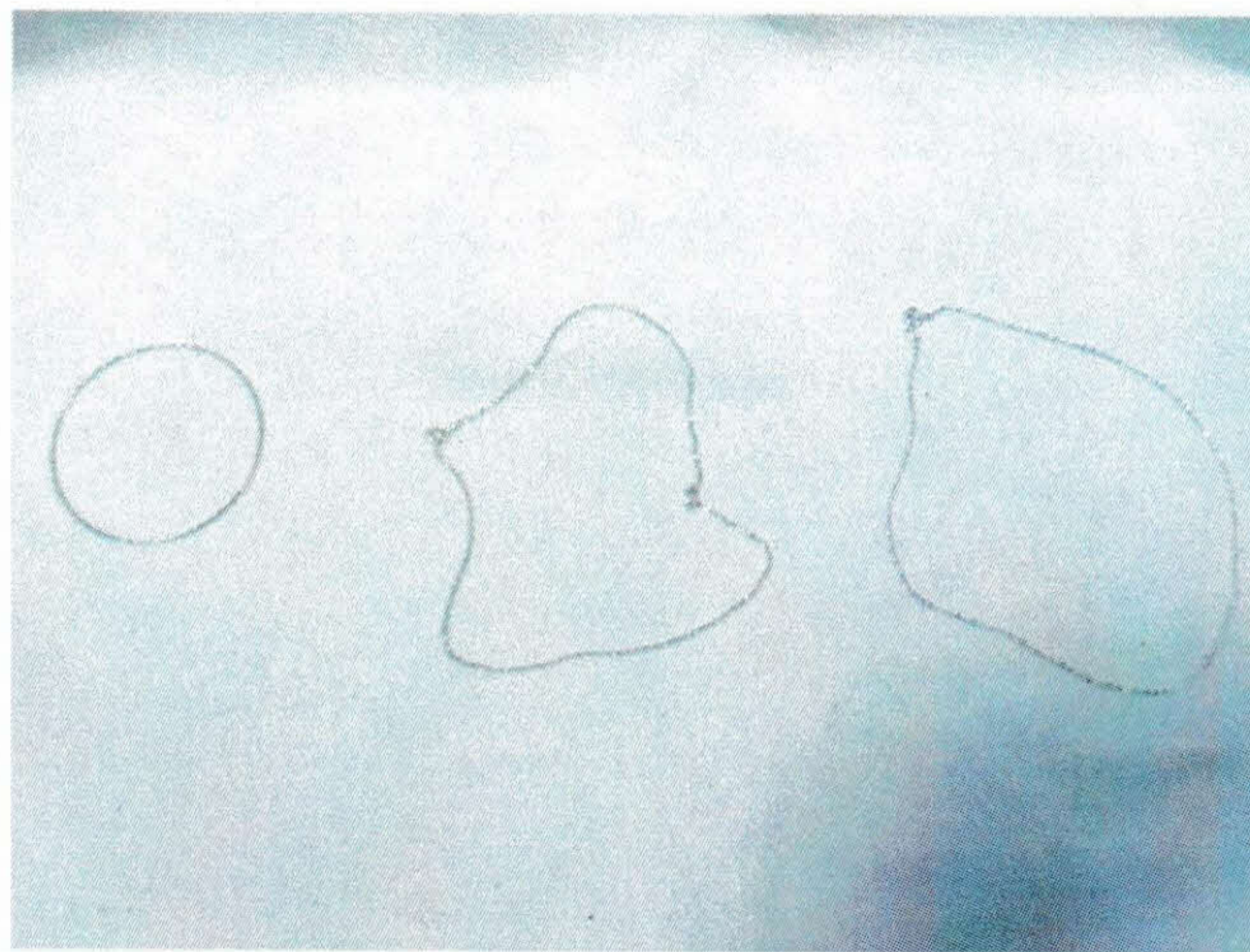


写真97

[やり方]

- ①まず、鎖のブレスレットの1本をリング状のブレスレットに通して、2つのブレスレットを結びます。繋いだら、鎖の部分をまとめて小さな塊にします(写真98)。

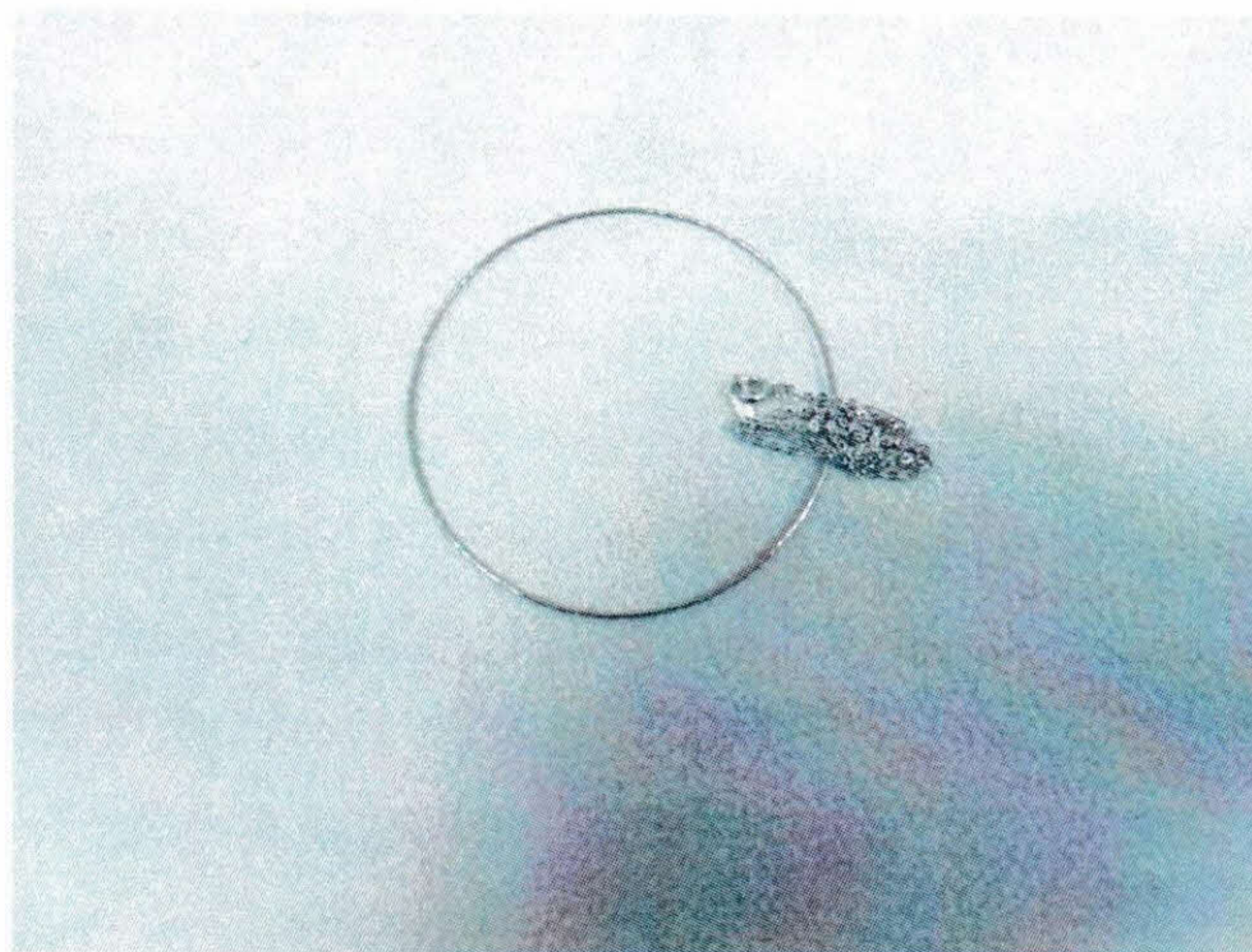


写真98

- ②リングに繋いでまとめた鎖の部分を右手の親指で隠し、右手にリングを持ちます。一方、左手はもう1本の鎖のブレスレットを指先に示します(写真99)。

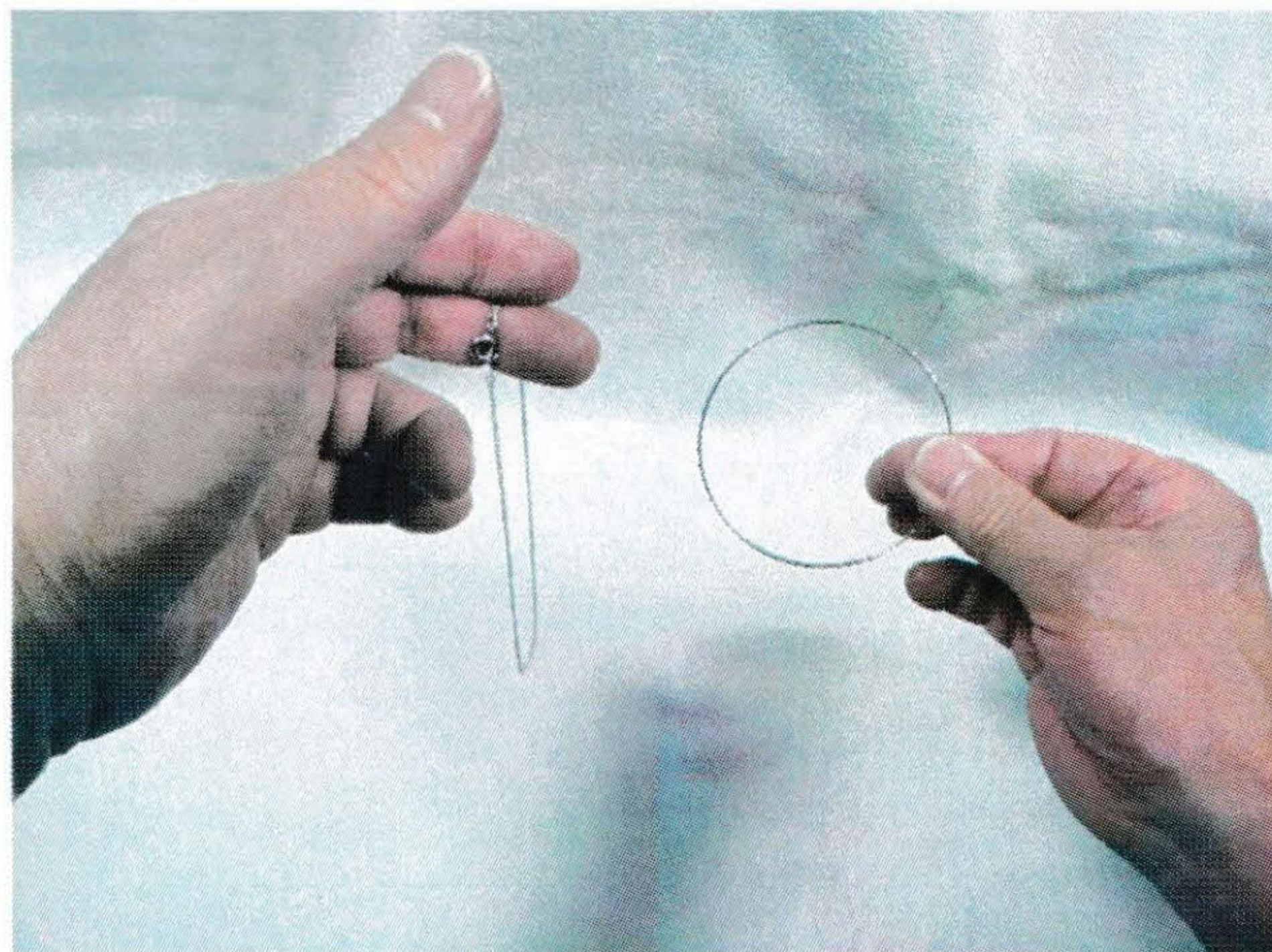


写真99

- ③左手の鎖を一度右手の小指にかけて、左手を空にします。その結果、右手は親指と人差指でリングを、小指に鎖をかけていることとなります。空になった左掌に右手の小指にかけていた鎖を置きます。置き方は小さくまとまるような感じで置くのです。そして、この上に右手の指先に持っているリングのブレスレットを置きますが、親指で隠し持っている鎖もすでに置いてある鎖の部分に重ねて置きます(写真100)。留め金部分が2つあるので、観客が鎖を重ねて置いたことに気づくのではないかと心配になりますが、その心配はほとんどありません。

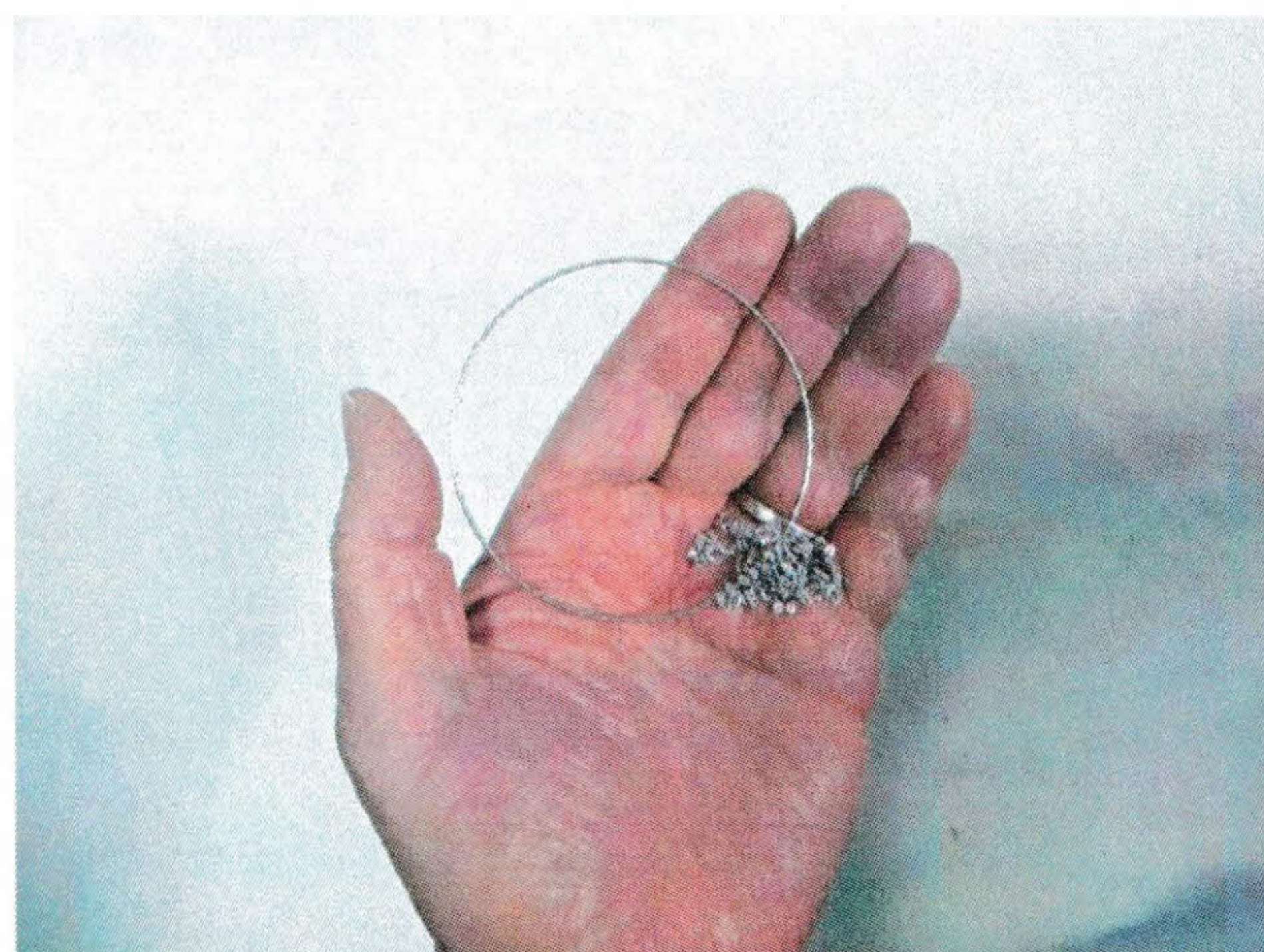


写真100

- ④左手の親指と人差指とでリングだけをちょっと持ち上げます。同時に、左掌から右掌へ2本の鎖を一塊で移し換えます。リングと鎖が繋がった部分は左手でカバーしています(写真101)。このまま左手でリングを上を持ち上げつつ、この動作の中で右手の人差指を向こう側から鎖に入れます(写真102)。
- ⑤この状態から、左手のリングをさらに上げ、右手の人差指で鎖を右へ引っ張ります。観客からはリングと鎖が繋がったように見えます(写真103)。右手に残っているもうひとつの鎖は右手にフィンガー・パームしたままです。左手の繋がった2つのブレスレットを観客に渡して点検してもらいます。

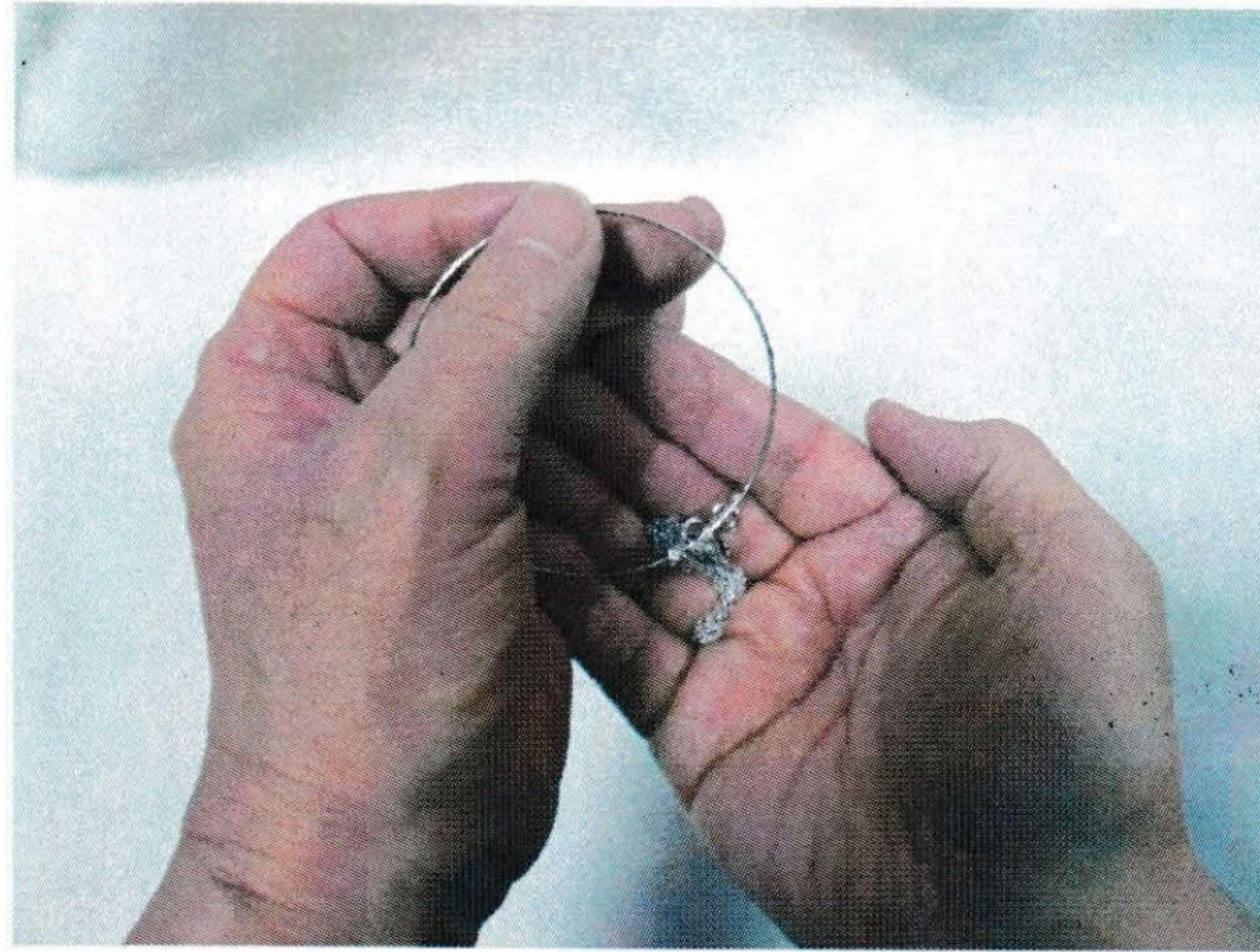


写真101

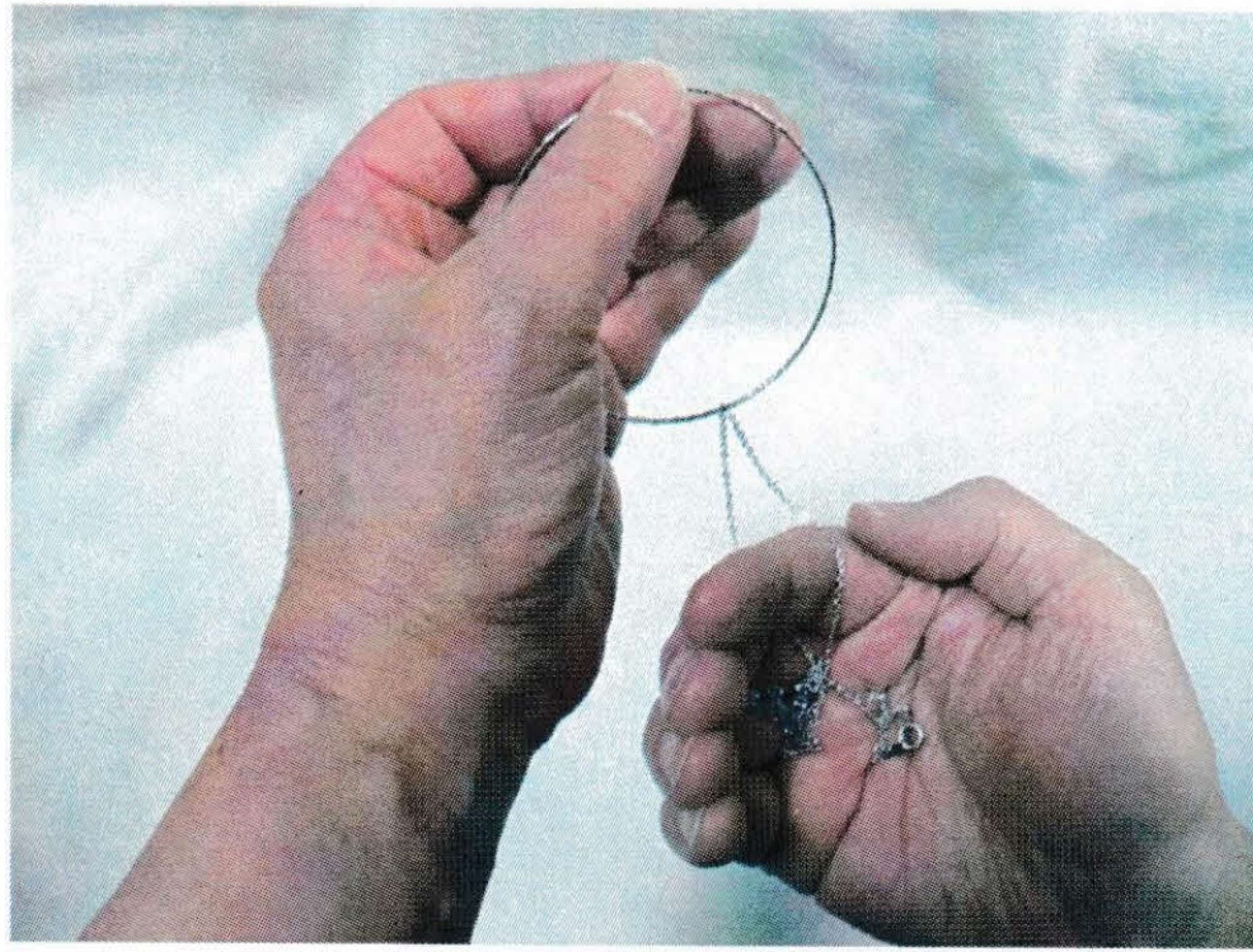


写真102

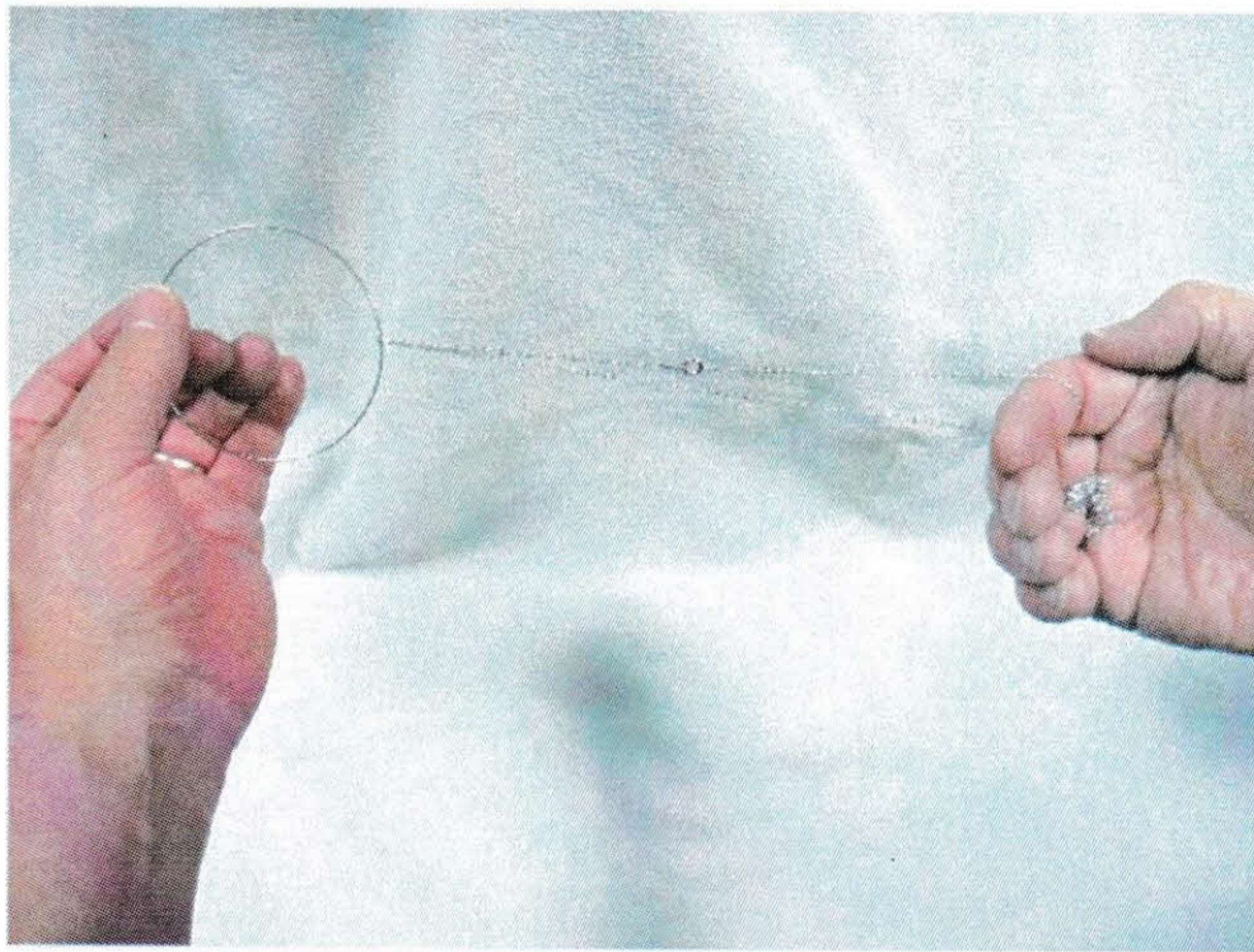


写真103

[コメント]

今回取り上げた片倉雄一君の手品も高木重朗さんが解説されたアンリ・マイヨールの手品も、いずれも最近になって用具一式を日本のネット・オークションで入手したもので、どちらもリアル・タ

イムで購入したものではありません。この種の昔の手品は、私がこのまま死蔵していたら、まさにそのまま埋もれてしまうので、あえて、取り上げてみました。特に、片倉雄一君も高木重朗さんもすでに鬼籍に入られていて、もはやその警戒に接することはないので、なおのこと、ここに残しておこうと思いました。

Sum It Up のための道具

(はじめに) "masquerade" は、本来、クローズアップ・マジック専門誌で手品道具の紹介誌ではありませんが、貴重なものや珍しいものはときどき取り上げようと思っています。今回も、こんなものよく考えたなあ、と思うので紹介します。"Sum It Up" というのは古来から有名な手品で、たぶん、読者のみなさんも一度は実演したことがあるものです。まず、従来のやり方を簡単に述べ、次に道具を紹介します。

[現象]

観客の一人にホワイト・ボードに4桁の数字を書いてもらいます。さらに、別の4桁の数字をその下に書いてもらいます。マジシャンは、この段階で、予言の紙に、ある数字を書きます。これは後で示します。マジシャンが3番目に、ある4桁の数字を書き、その下に客が4番目の4桁の数字を任意に書きます。最後に、マジシャンが5番目の4桁の数字を書き、ホワイト・ボードには5つの4桁の数字があります。客にその合計を出してもらいます。マジシャンが、さきほどの予言の紙を開くと、そこに書いてある数字は、まさしくいま客が合計を出した数字と一致しています。

[原理]

1番目と2番目の4桁の数字は客の任意です。この段階でマジシャンが書く予言の数字は、客が最初に書いた1番目の数字から2を引いて、万の位に2を加えたものです。すなわち、客の1番目の数字が仮に「4263」であったら、予言の数字は、「24261」です。もうひとつ別の例をあげると、客の1番目の数字が「7501」だったら、予言の数字は、「27499」です。この結果を得るために、マジシャンが書く3番目と5番目の4桁の数字は、いずれも直前の客の4桁数字(2番目と4番目)の各位の合計が9になるように書きます。すなわち、客の2番目の数字が「5726」だったら、マジシャンが書く3番目の数字は、「4273」です。また同様に、客の4番目の数字が「8165」だったら、マジシャンが書く5番目の数字は、「1834」です。以上が原理です。

[やり方]

原理の通りです。ただし、普通の紙に油性ペンなどで書くのは得策ではありません。なぜなら、客が最初に書いた4桁の数字と最後の集計結果の予言の数字が似ていることに気づく観客がいなくても限らないからです。黒板やホワイト・ボードなら、計算結果だけを別の場所に大きく書いて数字部分を消すことが可能だからです。

さて、この小品を5桁にして道具を作った人がいます(写真104)。



写真104

価格は95ドル(約1万円)ですから許せる値段です。一見すると、数字のブロックがサイコロのように1個ずつバラバラになっていて、それで任意の数字を構成するかのように見えますが、そうではなくて、各位の数は縦につながった1本の角柱スティックで、4面とも、上から4番目の数字以外の合計数字が18になるように作ってあります。したがって、この場合の合計は、上から4番目の数字の末尾から2を引いて、十万の位の位置に2を足せばいいのです。最初に5本のスティックを取り出して、客が任意に選んでセットしたら予言を書きしておくことは言うまでもありません。また、合計の計算は、最近では、ほとんど全員が iPhone などを持っているので、その計算機機能を使って間違いなく計算させる演出が可能です。あの単純な手品に、このような道具を考えて作成したことに敬意を表するとともに、私のように購入する人がいるのも驚きです。

前号からの顛末

前号の“masquerade”で、返金を希望される方には返金いたします、というお知らせをしました。同様な申し出を“aficionado”でもいたしました。その結果、実は、返金を申しこまれた方は、お一人でした。この方は、返金を申し出られるのに非常に丁寧な長文の手紙を認められて来られました。恐縮したのは私のほうで、もちろん、ただちに送金しました。

この方は、何と、“masquerade part one”からの購読者で、そのすべての号をお持ちとのこと。つまり、およそ40年間も購読者であったということで、驚くべきことです。いつも“masquerade”が届いたら貪るように読んだ、と手紙に書いてあります。すでに89歳になられて、今後の購読は難しいとの理由でした。感無量でした。返金の顛末は以上です。

これは、masquerade part 8 の No.3 です。

e-mail のアドレス: masqpart4@aol.com

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

(2020年3月)